
竜と書いてドラゴンと呼ぶ！

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜と書いてドラゴンと呼ぶ！

【Nコード】

N0699B

【作者名】

雨月

【あらすじ】

高校に入学したある少年はある日、ある竜と出会う。

竜が蛇に見えたある日

一、

俺の名前は白川^{しじがわ} 輝^{あきひ}。高校一年生だ。といつても昨日からだけど。そして、今はかなり大変なことに遭遇している。まずはこのことについて説明しよう。

初めての高校の授業をボーっとしながら終わるとすぐに学校を出た。中学のときは部活にはいつていたが今はちよつと面倒くさいのだ。それと予習なんかでいろいろと時間は必要なのである。家に続く河川敷を早足で歩き家を目指す。左を流れている大きな川をちらりと眺めた。そして、近くに橋がかかっており、その下にいつも見ないような光景があつた気がした。

「・・・・・・？」

人間、なかなか好奇心には勝てないものである。俺もその類の人間らしく、気になったので橋の下におりてみた。

それは、暗い青色をした大きな蛇に見えた。

そんなこんなで俺は今、睨み合いをしているわけである。・・・・・・不本意ながら・・・・・・

そいつはよくよく見たら蛇というより竜の形をしていることに気が付いた。頭には角が生えているし、手足だつてある。目の前で火でも噴いてくれたら完璧なのだが・・・・

じろり

今まで俺の目を見ていた謎の・・・やはり蛇より竜にしよう。謎の竜は俺にかけているかばんに目をやった。ちなみに、俺のかばんの中に入っているものは次のものである。

勉強道具に筆記用具、そして先ほど友人からもらったパンである。

ぐうう

ここで間の抜けた音が聞こえた。今の音は俺が出した音ではない。まさしく今、俺の前に立っている竜が出したものである。つまり、この竜は勉強がしたいわけではなく、お腹がすいているのだ。今の俺にパンは必要ない・・・わけでもないが別にいいだろう。俺は動物が好きだ！（もつとも、竜が動物に入るかわからないが・・・）靴からクリームパンを出して竜の前に放り投げる。手に乗せて差し出した日には間違いなく腕ごと持っていかれるに違いない。

竜は匂いを嗅いでそのパンをくわえぱくりと食べ終えた。俺はその隙に竜から離れる。今でパンは打ち止め、竜はまだ腹をすかせているなら今度あの口に納まるのは多分俺に違いない。まだ俺は高校一年だ。恋だっけしたいお年頃なのだ。入学早々、幻獣に食われて死にたくはない。

案の定、竜は俺を再び見つめてきた。

靴の中にはすでに食べ物はないと知っているのか俺を上から下までなめるように見てくる。そんなに見ると緊張してしまふ。自分では食べられたらおいしいと思う、なぜなら食べられてもおいしくないなら食べられ損だ。俺としてはおいしく食べてもらいたい。ちなみに一口サイズで食べてくれる相手がいいなあ。

竜は後ずさりしていた俺に迫ってくる。ああ、お父様、お母様、息子は大きくなっておいしく食べられるようです・・・こんな時は騒がず焦らずしなければいけない。ま、目をつぶるぐらいは神様も許してくれるはずだ。好奇心は人を殺すことができる俺はこのと

き実感したね。

世の中、何がある？

竜が蛇に見えたある日（後書き）

ある日、僕の自転車の中に蛇がとぐろを巻いていました。見つめ合うこと数分、その蛇は僕の前からいなくなりました。さて、どうだったでしょうか？ 試しに書いてしまったようなものですが、面白いと感じてくれた人がいたらうれしいです。ご意見、ご感想を出来ればお願いしますね。

おばさんはおばさん

二、

「・・・・・・・・ん・・」

「輝さん、起きて下さい。誰かが下から呼んでますよ。」

「・・・・・・・・ん??」

寝ぼけているのか知らないが俺の目に映る人物を俺は知らない。
俺の目に映る少女を知るわけがない。俺には妹などいないし、姉もいない。ちなみに兄もいないし弟もいない。更に言うとな彼女もいないのだ。というより知り合いの女子もほとんどいない。

「・・・・・・・・どちら様で?」

「なに言っているんですか?私を連れてきたのはあなたですよ。」

「・・・・・・・・俺が女の子を家に入れた?んな馬鹿な事があるわけがない
いや、事実嬉しいのだが、俺は人知れずに犯罪を犯すような人間ではない・・・・・・・・と思っている。」

「もう忘れたんですか?パンをくれたじゃないですか?」

パンで女の子が口説けるなら安いもの・・・・・・・・?ん?ま、まさか
この女の子は・・・・・・・・もしかして・・・・

「・・・俺が・・・連れて来た竜？」

「はい、そうです。」

「・・・あつさりしているなあ。なんて人だ。いや、竜だ。竜はみんなこんなにあつさりしているのか？」

「というより・・・早く膝からどいてくれませんか？寝るときから私の上に乗ってたんですよ。」

ああ、だから彼女の顔が横にあるのかあ。通りで柔らかいと思っ
たよ。いやあ、竜に膝枕されているなんてもしかして人類初か？ま、
とりあえずはさっさとどこうかな？

ベッドの上に座って今俺の前にいる少女をまじまじと見てみる。
うーん、髪型はポニーテールでかなり黒い感じの青色である。うん
うん、意外と胸がでかいなあ・・・じゃなくて・・・

「・・・というよりなんで俺についてきたの？」

「それはですね、初めて私にやさしくしてくれた人間ですからね。
これからよろしくお願いしますね？」

「・・・は、なにを？この子は何を言ってるの？」

「・・・何をよろしくお願いするんですか？」

「はい、これからはずっと一緒ですよ。」

「なんで？」

俺は何か間違いを犯したのか？若さゆえの過ちを犯してしまったのか？それ故にこのような訳の判らん少女を世話をしなければならぬのか？すべての責任は……俺なのか？

「ま、あなたの家に住む人が許可すれば私はこの家に住むことにしますよ。」

おお、意外と常識的だあ！！これは早速おばさんとおじさんに聞いてみよう。

ここで説明しておくが俺の母さんと父さんはいないのだ。小さいころ、天に召されてしまった。それ以後俺は爺さんに育てられていたが爺さんがいなくなると爺さんの紹介により血の繋がらない家に送られたのだ。別にいやだとかそんな感じはない。おじさんとおばさんはやさしいし……理解もある人物だ。

「輝さん、そういえば先ほどから一階であなたを呼んでいる人がいますよ。早く行きましようよ。」

俺は頷いて先に階段を降りる事にした。このかわいそうな竜には悪いがここは俺の家ではないので選択権はあのおばさんとおじさんにある。ま、どちらかというならおばさんが決めるに違いない。

「輝、一回呼んだらすぐに降りてこいと言っただろう！！またこの前みたいに関節外されたいのかい？」

「はい、ごめんなさい！！」

ちなみに今怒っているのはおばさんの方だ。

口は悪いし、口より手が早いときがよくある。

しかし、俺は実はこのおばさんはやさしいことを知っている。

あれは俺が中一のころ、上級生の不良グループにぼこぼこにされた時におばさんはその相手に仕返しをしてくれたのだ。そして、優しさ故にその後、俺にいろいろと相手をぼこぼこにする技を教えてくれたのだ。……そりゃもう、教えてくれる度に体中に打撲ができてます。ちなみに心配してくれるのはおじさんだけです。

「で、後ろにいるそのかぁいい女の子は誰だい？まさかダンボールとかにはいつてたんじゃなからうね？それともなんかものでつってきたのかい？」

うわ、微妙に鋭いなあ。その鋭さは銃刀法違反じゃないだろうか？

「はい、私の名前はですね……私の名前は……」

俺の裾をちよいちよい引つ張って寄せて耳打ちする。

「名前を決めてくださいよお。」

「えー！なんで？」

うーん、いきなり言われても困る。だが、名前を付けてくれと言われたら付けるしかないだろうなあ。

「……葵^{あおい}なんてどう？」

「……ほんとに考えているんですか？」

ちよつと適当だったかと思い、やり直そうとしたがおばさんの耳も鋭かった。

「ほお、葵かい名前じゃないか。それでその葵ちゃんも輝のなんだい？」

これにて名付け完了。半ば強制的に竜の名前は葵と名付けられたのである。・・・俺のせいじゃないもん！俺の声が大きかったわけじゃなくてあのお婆さんの耳が悪いんだもん。

「・・・わ、私はですね、その、ここで生活したいんですよ。」

「よし、いいだろう。」

・・・おいおい、もっと深刻に悩みましょうよ。二行で即決。この人の頭の中はどんな構造になっているんでしょうか？誰か教えてほしい。

喜んでる竜を横目で見ていた俺だが、身構えていた。このとおつてもやさしいお婆様がただでこんな得体の知れない少女を家に置くわけがない。

「だが、条件がある。」

ほら来た。きつと凄い奴が待つてゐるぞ。葵の顔をどことなく緊張しているし、もし葵がその条件を拒否すればお婆さんは気が短気から間違いなくここを追い出されてしまうだろう。

「・・・悪いがその輝と同じ部屋だ。今のところ部屋に余裕がないんだよ。」

「はい、ありがとうございます。」

・・・わお！それ俺にとってかなり拒否したい条件じゃん。だが、

ここで俺が文句をいえばどうなるであろうか？試してみたいがそのときは竜が住んでいた橋の下で過ごすしかないかもしれない……

「……輝、なんか不満でもあるのかい？」

「い、いえ、おばさんの優しさに感謝しているくらいでございます！！」

し、しまったあ！！おばさんの前では『おばさん』と呼んではいけないかったんだあ！！

「ほお、私の年をもう忘れたのかい？私はまだ二十二だ！！」

俺は言葉で一発殴られたのである。そりゃもう、もらしそうになっちゃいましたよ。

おぢやんとはおぢやんと（後書き）

顔が怖い人は災難が多い

三、

俺は葵を連れてさつさとおばさんがいる所から退いた。逃げたのではない、戦略的撤退だ。勝てない相手に会ったら逃げる！勝てない相手には頭を使って勝て！！これがあのおばさんから教えてもらった二つの極意である。矛盾しているような気がしてならないのは俺だけか？

「さ、私に部屋を案内してください。」

「・・・さつきまで居ただろうに・・・」

俺はため息を出したい気分だ。夕陽に向かって走りてえよ。海に向かって叫びてえよ。こうなったらやけだ。

「・・・お客様のお部屋はこちらでございます。」

「いえいえ、どうもありがとうございます。」

俺は先ほど降りて来た階段を再びあがり自分の部屋の扉を開ける。

「こちらがお部屋となっております。どうぞお入りください。」

「ふうん、結構綺麗なんですね。さすが輝さんです。」

何がさすがなのかわからないが俺は葵を先に部屋に入れる。どう考えてもおかしいだろうに・・・年頃の男子がいる部屋に女の子を

おくのは絶対におかしいと思うぞ。・・・まあ、俺はどちらかというと一人のほうが好きだ。小さいころから転校の繰り返しだったからなあ。うん、俺だったら襲うなんて事はしないだろうね。大体相手が人間じゃないし・・・」

「意外に輝さんって細身ですけど筋肉あるんですね？」

「そりゃまあ、筋肉をある程度はつけておかないとおばさんからのしつけとやらに対抗できないからな。」

今葵はベッドに座っている。外はまだ夕焼けが残っていて散歩したら楽しいかもしれない・・・ここは葵と外に出てみよう。

「なあ、散歩しねえか？」

「ええ、いいですよ。」

うん、あっさりしているのもたまにはいいかもしれないな。俺は葵より先に部屋を出た。なぜだか葵は俺が動かないと動かないようだ。

やはり外はきれいな夕焼けが出ていた。俺は葵の隣で夕焼けを見ている。そして、葵は俺とまったく逆のほうを見ている。

「・・・なにしてんだ？」

「輝さん、あれって誘拐じゃないんですか？」

なるほど、葵が指差す方に黒い服を着て白いマスク、サングラスをしている大人が少年を一人車に入れようとしている。身代金目的の誘拐だろうか？

「葵は今すぐ警察に行ってきてくれ。俺はその間に車の番号を見たあとでなんとかするからな!!」

「わ、わかりました!!」

俺は少年を今にも連れ去ろうとしている人物の車のナンバーを覚え、その黒い男に静かに近づく。

「・・・雅彦、何度言ったら早く帰ってくるんだ!! 外には怖い大人が多いんだぞ!!」

「いやだあ、もつと遊ぶんだあ。」

・・・どうやらこれは単なる誘拐事件ではないような気がするの俺だけだろうか? こうなったら意を決してたずねるしかない。

「・・・すいません、どうかしたんですか?」

俺がそのように尋ねると少年を抱えていた大人はこう答えた。

「ああ、すいませんねえ。ほら、雅彦画素直に言うことを聞いてくれないからお兄ちゃんに迷惑をかけてしまっただろう。」

「だってまだ家に帰りたくないんだもん!!」

大人のほうはため息をついてサングラスとマスクを取った。俺は少々驚いた。なぜならその顔はかなり凶悪そうでサングラスとマスクをつけていたほうがまだましである。なるほど、何でこのおじさんがこのような格好をしていたかわかった気がする。・・・でも

どっちにしてもこれじゃあ誘拐にしか見えないなあ。

「……すいませんねえ、騒音であなたがたのデートの邪魔を
してしまって……本当に申し訳ありません。ほら、雅彦も謝りな
さい。」

「はい、ごめんさい……」

少年はそういうと自ら車に乗った。そしてその顔がとっても怖い
おじさんは再び頭を下げて車に乗って俺の前から姿を消した。

「……よかったですね、誘拐じゃなくて……」

「……!？」

俺の隣には葵が立っていた。警察に行ったのではなかったのか？

「どうして警察に行っていないんだ？」

「……別にいいじゃないですか。そんなことより散歩の続きをし
ましょうよ。」

今日は本当に無性に疲れる一日だと俺は思いながら再び歩き出し
た。そんな俺の隣を葵が今度は俺を見て歩いている。

「……なんか御用ですか？」

「いえ、なんでもありませんよ。」

葵が夕日を見ている可能性はゼロだ。俺がいるほうに見えるのは

からすの集団と電線ぐらいなものである。

「……ところで聞きたいんだが……おまえは何で橋の下にいたんだ？」

「名付けてくれた輝さんがおまえと呼ばないでください。」

おおっと、これははじめてみる表情だ。とっても怒っているように見える。まあ、俺のほうも無粋な真似をしたからなあ。

「すまん、それじゃ、改めて聞くなぜ葵はあの場所にいたんだ？」

「あそこは私が生まれた場所だからですよ。ただそれだけです。」

葵はそう言っただけで今度は夕日を見た。その横顔は綺麗だった……かな？

「んじゃ、そろそろ帰ろうか葵……」

「はい、わかりました。」

回れ右をして俺と葵は再び歩き出した。普段は俺一人が歩く道を今日は二人で歩いている。こんなことは生まれて初めての事だった。

「のわあー!!」

隣で葵が転ぶ。その足元にはバナナの皮が転がっていた。……バナナの皮で転ぶ奴もはじめて見た。しかもパンツ丸出しだ。

「いたたたあ。」

「なにやってんだか・・・ほら、掴まれよ。」

俺が差し出した手を葵が掴む。その瞬間になぜだか知らないが葵の頭の中を見たような気がした・・・

今日の夕飯はなにかなあ・・・

うわ、どうでもいいことだ。

「・・・輝さんのスケベ。」

・・・どうやら葵の頭の中にも俺の考えていたことが伝わったらしい。ちなみに俺が考えていたことは・・・

やっぱり葵だけにパンツの色も青いんだなあ

もしかしなくても俺はだめ人間かもしれない。さっきから葵は俺の顔を見ているし・・・

顔が怖い人は災難が多い（後書き）

いやいや、面白いかどうか自分でわからないもんですね。今のところはできるだけ続くようにがんばっていききたいと思います。

動き出したなんかの運命

四、

葵の体を引っ張り起こして俺は手を放そうとしたが、葵は俺の手を放そうとはしなかった。

「何で手を放さないんだよ？」

「別に減るわけじゃないからいいじゃないですか。」

ぐ、もつともな意見だ。反論の余地がねえ……。俺がそんなことを考えていると葵が話し掛けてきた。

「私に手を差し伸べてくれる人は今までいなかったんですよ。だから、私はその手にすがりたいんです。これはいけないことですか？」

なんだ？このなんか難しそうな質問は？イエスかノーで答えればいいのか？

「いや、俺だって誰かにすがりながら生きている毎日だからな。すがることに関係ができると俺は思っている。」

何気にいいこと言ってるじゃねえの俺？

「そうですか、ありがとございます。」

お礼まで言われたからうれしいなあ。しかし、手に力を入れて俺の手をぎゅっと握ってくれるのはうれしいがそりゃちょっと力が強

すぎじゃねえのか？あたたたたっ！！

「……さ、早く夕飯を食べに行きましょうよ。」

「ああ、そうだな。」

なんだかとてもいい場面である。うん、これは来たね。何が来たのか知らないが俺としてはなんかこう、心にぐっと来たね。

そして、夕食後。

いやあ、葵のたべっぷりは凄かったなあ。まだ仕事から帰ってきてないおじさんの分までたべっちゃったからなあ。ついでに俺のトンカツもいつのまにか皿の上から俺を残して去ってしまった……。ああ、トンカツよ、おまえのことは忘れない。

「うぶうぶ。ちょっと食べ過ぎたみたいです。」

「そりゃまああれだけ食べれば苦しいわな。」

今、葵は和室の畳に寝転がっている。お腹はパンパンに膨れている。まるで風船だ。

「う、生まれる。」

「何が？」

「輝さんの子ども……。」

「叩いていいか？」

まったくなんて奴だ。お腹さするの止めちまうぞ？おまえは幸せだろうが俺は腹が減ってるの！！

「輝さん、死ぬ前に一つだけお願い事を聞いてください。」

「なんだ？」

「テレビつけてください。」

・・・パシリか？ここで文句をいうのも子供くさいので俺は黙ってテレビをつけた。テレビでは明日の天気予報をやっているようだ。

「・・・明日の天気は、全国的に晴れる事はまずないでしょう。多分、雷雨となると思われます。さて、次に雷が落ちる確率です。」

「輝さん、今はこんなもあるんですね？」

「いや、俺も見るの初めてだ。」

「・・・おとめ座に落ちる可能性は・・・10パーセントです。」

「・・・なんだこれ？新手の占いか？」

「そして、最も確立が高いのはかに座のあなた！！95パーセントです。」

俺、かに座だあ！！

「あ、私かに座ですよ。」

・・・なんて不吉な前兆だ。こんなもん、あたるわけがない。

「・・・・じゃ、俺風呂はいつて来る。」

俺は和室を出て風呂に向かった。こんな不安がぬぐえないときは風呂に入るのが一番だ。

「ふいいいい。」

親父くさいと言われそうだが、しょうがない。俺は顔をタオルで拭いて湯船から上がり体を洗おうとしてギョツとした。

「輝さん、背中流しましょうか？」

「な、何入ってきてんだよ!!」

見れば扉を開けて葵がこちらにやってきているではないか！幸か不幸かしろいもやでほとんど見ることはできない。俺は当然のように後ろを向く。

「敵に背中を向けるのはいけないことですよ。」

「いや、裸でくるほうが卑怯だろう!!もうちょいで風呂から上がるから葵は外にいろよ。」

「遠慮しないでくださいよ。大体裸ではありません。タオルを巻い

てますよ。」

なるほど、後ろを振り返ってみると葵はタオルを体に巻いている。

「ね、これで安全ですよな？」

「いや、やっぱり俺には無理だ。じゃ、先にあがるわ。」

葵の隣を歩いて出口に向かう。すると、再び扉が開いた。そこに立っているのはおばさんである。

「いいか、輝。これも修行だ。おまえは女の子に弱いからな。あの女番長の時もまったく抵抗せずにぼこぼこにされたからな。葵でなれることだな。」

そして、俺は覚悟を決めた。

あとは寝るだけとなったので自分の部屋にあるベッドを眺める。さて、ここで一つだけ問題がある。

「さ、夕方のように私に覆い被さってきてください。」

葵が俺のベッドに乗っているのだ。これはどうしたことだろうか？まあ、別に何もしなければいいのか？へ、上等だぜ！！こうなりややけだ。

「……何もしないでくださいね？」

「まかせておけ、葵に手を出すわけがなからう!!」

ふはははは、甘かったな葵。俺をなめてもらったら困るぜ!って、葵、おまえなにやってんだあ。

「葵、俺を後ろからホールドするな。」

「いいじゃないですか、何か減るんですか?」

俺に二度目の攻撃は通じない。これが俺のこたえだあ!

「減るんだよ、なんか、こう、精神力ってやつがな・・・」

「それならもつと減らしてあげますよ。」

その日、俺は心の中で悲痛の叫びをあげまくった。だが、まだまだこの生活は始まったばかりである。俺はその次の日にそれを知った。

動き出したなんかの運命（後書き）

えーっと、まだまだ始まったともいえませんが・・・できるだけ面白くしていきたいと思います。努力はしてみますね。

人生なんてうまくいかない

五、

目を開けるとベッドに寝ていなかった。俺はどうかやら葵により落とされてしまったようだ……。その証拠に上から葵の寝息が聞こえる。

……いや、どうやら葵が俺の体の上に乗っているようだ。

「……葵、重いからどいてくれないか？」

「……すう。」

返事もしてくれない。まだ寝ているようだが俺はこのままではおばさんに怒られてしまうのだ。毎朝俺は町内を走らないといけないのだ。これは基礎体力をつけさせるための特訓らしい。

俺は葵をどかしてさっさと立ち上がり着替える。今日は休日なので学校はない。だが、窓の外を見ると雨が降っていた。まだ小雨なので大丈夫だろうと俺は雨具を身につけ外に出た。

「さて、輝さん行きましようか？」

何故だか知らないが葵までついてきたのだった。さっきまで寝ていたと思ったがいつのまにか玄関のところで待っていたので正直驚いた。とりあえず大きな木がある近くの山に登って降りることにした。

「いやあ、雨はうれしいですねえ!!」

葵はしきりにはしゃぎながら俺の後ろをついてきている。朝飯も

まだ食べてないのにあんなにはしゃいでいて疲れないのだろうか？

俺は昨日のことを忘れていた。あれは嘘なんかじゃないとこのあと俺は知る。そう、ある程度山を登った時に雷が鳴り出したのだ。

「ごろごろ

「輝さん、雷が鳴り始めましたよ。」

「そんな事言わなくてもわかるって。」

どうやらかなり近いところで鳴っているようだ。しかし、もう少しで大きな木がある折り返し地点だ。このままいけば間に合うかもしれない。だが、考えが甘かった。

がしゃーん

「・・・輝さん、どうやらここから見える大きな木に雷が落ちたようですよ？よかったですね、慌てて近づいてなくて・・・今ごろおいしくこんがりなつてたかもしれませんねえ」

まるで人事みたいだ。ちなみにいうなら死ぬときは葵と一緒にだつたに違いない。うんうん、こんがりなるのはもしかしたらおまえかもな。

俺は好奇心から大きな木を目指して思いっきり走り出した。雷がこんなに近くで落ちるなんて生まれてこのかたあったことがない。木には火がついていたのだが、急に大雨となったのですぐに消えてしまったようだ。だが、俺の目の前に広がっている光景はそれだ

けではない。

「……あ、輝さん。」

「……ああ、なんだあれ？」

紫色の塊が、バチバチと音を立てて俺たちの前にあるではないか・
・ちょうど木の中心部分にあるということは間違いなく電気の塊に違いない。……いや、そんな訳ないか？

「あ、あれ動いてますよ。」

紫色の塊はうねうね動いている。そして、俺が近づくとそれはどこかで見たことがあるような形になったのだ。いや、昨日見たばかりだ。

それは、はじめ黄色い蛇に見えた。

「……葵、お仲間さんか？」

「いえ、知りませんよ。」

こちらを敵意のこもった目で睨んでいる。体の周りには戦闘開始の準備が知らないがバチバチと音を立てて電気の塊のようなものが浮かんでいる。

……こういうときはあれだ、手を後頭部の後ろに持っていつて相手に向かってお知りを向けて無抵抗のポーズ！！

葵も真似をしているようだ。だが、黄色い竜は段々こっちに近づいてくる。その気配は一向に変わっておらず、どうやら機嫌が悪いようだ？

「・・・もしかして・・・木が一発で黒焦げにならなかったからか？」
「しゃー！..!」

どうやら図星のようだと俺は思った。・・・どんまい。そしてこれは相手が見せた隙に違いなかった。俺は後ろを向いている状態からまわしげりを竜の顔に打ち込んだ。さらに竜に飛び乗り頭を押さえつける。

がぶう

竜に腕をかまれた瞬間、体に電気がほとばしったのを感じて俺は気を失った。

「・・・輝、おまえは馬鹿か？」

「・・・うるせえ爺さん。竜に喧嘩を売る馬鹿がどこにいるんじゃない？」

「正当防衛を主張する。」

「馬鹿者、あれのどこが正当防衛じゃ？いつぺん天国に来てみるか？」

「・・・ごめんなさい。」

「わかればよろしい。それとわしが頼んだ本を必ず忘れるでないぞ。」

「へえへえ、ちなみに聞くがあの黄色い竜もこの前みたいに唱えたら姿が変わるのか？」

「・・・さて、試しにやってみたらどうじゃ？」

「『我が名において命ずる。真の姿を見せよ。』」

「ちなみに責任はおまえが取れよ。」

「・・・爺さん、そういうことは先に行ってくれないか？」

「ふん、青二才目が・・・それだから彼女もできのじゃ！わしは天国のプリティ〜なお姉ちゃんとスキンシップを取るのが忙しいからこれで失礼するぞ。」

「うるせえ、無責任な爺さんなんて早く捕まっちまえばいいんだ！
！」

「お前さんはすでに一度死んでいる身じゃよ。さっきの電撃をもろに心臓に喰らったからな。だが、わしが閻魔様に頼んでこの世にとどめておるのじゃ。感謝しろよ。」

「・・・ありがとうございます。」

「うむ、よろしい。（実はおまえが来てわしのハーレムを取られたらたまらんからな。）」

「爺さん、一つ聞いておきたいことがあるんだが・・・。」

「なんじゃ？天国には天使のお姉ちゃんがいっぱいいるがその中の誰かを彼女にしたいのか？」

「いや、そうじゃなくてだな、いったい竜って何だ？」

「・・・さあ？」

「とぼけんなよ!!」

「悪いがわしはどうやらボケちゃったみたいじゃ・・・それではのう。シーユーじゃ。」

「嘘つけ爺さん!!こら、まちやがれえ!!」

耳に誰かの鳴き声が聞こえる。すぐ近くでないているようだ・・・体が痺れている俺にはわからない。ああ、とっても刺激的な一撃だったなあ。

電撃という名の刺激

六、

目を開けると雨が俺の顔にすごい速さで当たっている。とっても刺激的だ。というよりかなり痛い。特に肩が・・・

「ああ、輝さん・・・昨日初めて会ったのにもう死ぬなんて・・・よっぽど日頃の行いが悪かったんですね？」

「・・・勝手に殺すなや・・・」

俺はすごい力で肩を掴んでいる葵から離れた。近くには金髪の小さな・・・中学一年生ぐらいに見える少女が倒れている。

「葵、あの子誰？」

「ああ、あれは先程の竜ですよ。輝さんに小さな雷を当てたあと雷に打たれたようにその場に崩れてあの形になったんです。」

「・・・それまた的確な比喻表現を使ってるじゃないですか・・・とりあえず俺はなぜだか知らないがあの気絶しているであろう少女に謝らないといけない気がした。」

「・・・葵、悪いが先に帰って風呂の準備をしていてくれないか？」

「・・・わかりました。」

葵は素直に従ってくれて山を走って降りていった。俺は倒れてい

る少女の横に行くとその体を背負うことにした。見た目と違わぬ軽さである。

「・・・さて、どうしたもんかな？」

未だに体がびりびりしていつものように体に力が入らないことに気が付いた。足もなんだか疲れているのか知らないが思うように動いてくれない。しょうがないので雨がやむまでどこかで雨宿りをすることにした。ちょうどこの黄色い竜がいたところは雨があたつておらず、そこで休むことにした。

「・・・んっ・・・」

隣に降ろした少女は目を覚ましたようだ。ここで詳しくこの少女の見た目について彼女が完璧に状況把握できるまで説明させてもらおう。

髪は金髪でツインテール。

ああ、こんな子が妹にほしいなあ・・・じゃなくてだ。

目つきはちよつと鋭い。なかなかかわいい顔をしているのにもったいないな・・・。身長も低いし・・・俺視線では中学二年ぐらいかな？体の発育も遅いみたいだし・・・幼児体系という奴だ。ロリコンな人ならどうにも好きそうな感じである。俺？俺は好みは・・・おつと、隣の電撃少女が俺の存在に気が付いたようだ。

「・・・ありつたけの電気を流し込んだのに死んでないなんて・・・」

その鋭い目を思いつきり見開いて俺を見ている。どうやら俺をマジであの世に送るつもりだったらしい・・・。ああ、俺は天国と地獄、どっちに行つてただろうか？

「おあいにくさま、そう簡単に俺は死なないみたいだからね。」

「……私を誘拐しても身代金は一切でないわよ。」

どうやらこの敵意剥き出しの少女は力を使い果たしたようだ。俺から離れようとしているがまったく力が入らないらしい。

「……いや、別に金がほしいわけじゃないぞ。」

「じゃ、じゃあ……まさか……私が目的!？」

いや、俺としては遠慮しておこう。というより願いさげだ。

「……俺は少女趣味じゃないからね。むしろ迷惑だ。そんなことよりお前はいつたいなんだ？」

「雷よ。ちよっと前まではね……」

そりゃまあ、あの大木を木炭みたいにしたところを見るとあながち嘘ではないと思うのだが……。

「雷は皆憂さ晴らしをする為に地上に落ちるの、そのときはロープを巻いて雲の上から飛び降りるんだけど私は運悪くロープを巻くのを忘れていたの……。」

ぶっちゃけ、ひも無しバンジーというやつですか？雲の高さからバンジーも怖そうですがひもなしだったら死ぬでしょうに……。

「拳句の果てに狙った獲物は一発で消滅させることができなかった

し、ロープもないから空に戻ることもできなくなったの……」

前者はまあ、もうちょい大きくなれば達成できそうなものとして後者は自業自得だろうに……。しかし、あてがないのはかわいそうだなあ。

「特に極めつけは変質者に教われて力を全て使い終わるなんてまったく、馬鹿げた話だわ。」

その変質者は俺ですか？別に何もする予定もありませんが？

「はいはい、じゃあ、俺の家にきてくださいよ。似たような人がいますからね。」

あのおばさんのことだから間違いなく許可するだろうがこの少女がどう出るかはまったくわからない。

「……そうね、ありがたく私があなたの家に行つてあげましょう。輝さん、早く道案内をしてください。」

どことなくえらぶっている気がしてならないが相手は多分俺より年下だからここで反抗するのもなんだか子供みたいだ。俺はとりあえず立ち上がり少女に手を差し出した。

「ほら、つかまりなよ。」

「……しょうがないわね。」

やれやれ、手をつかんだのはいいが一向に立ち上がらないところを見ると間違いなく立てないんだろなあ。俺は手を離すことにした。

「あっ……」

当然のように立ち上がりうとしていた少女は支えがなくなり後ろにこける。ははは、いいざまだ。

「なにすんのよー!」

「ほら、これなら移動できるだろう?」

俺は少女に背中を見せる。いいかげん腹が減ってきたので早く帰りたい。拳句の果てに濡れているので風邪をひいてしまう可能性も高い。

「……ふんっ!」

そんな感じで俺の背中に軽い体重がかかる。俺は立ち上がって歩き始めた。ああ、神様……できればまともな女の子との出会いをください。

「まあ、蹴ったのは悪かったよ。」

「……べ、別にいいわよ。」

ああ、俺って不運。背中にあたる感覚もしょぼい。もうちょっと強くしていいのになあ。

「……私も悪かったわよ。殺そうとして……」

「?なんか言った?」

「ふんっ！何もいつてないわよ。」

・・・これから先が思いやられるのは俺だけか？それともこれは俺が何か悪いことをしてしまった償いなのか？教えて、おじいさま。てか、今度あつたら絶対に何か聞き出してやる！！

電撃という名の刺激（後書き）

先はまだまだ長い！！どうも、皆様・・・どうだったでしょうか？面白かったら幸いです。それと感想や意見をお待ちしておりますのでよろしくお願いしますね。

二匹と数えるべきか二人と数えるべきか……

七、

ぱらぱらと雨が降る中、家の前におばさんが立っていた。俺の目がおかしくないのならおばさんはまったくぬれていない。

「……遅かったじゃないか？どこで油を売ってたんだ？」

「……言えない、ちよつとじいさんと会ってたなんて口が滑つてもいえねえよ。」

「いえ、ちよつと雷が俺に直撃しただけです。」

そして俺は背負っている少女を指してこういった。

「葵の妹なんですが……この子も居候させていいですか？」

なんとも適当な設定で悪いがしょうがないのだ。俺の平均的な頭ではこのくらいが限度……それにこれ以上複雑にしたら説明に苦労するに違いない。

「……そうかい、あんたが責任をもつてきちんと世話するんだよ。ところで名前はなんと言うんだい？」

俺はてつきり後ろの少女が答えると思ったが、予想に反することがおきた。

「私の名前なんてないわよ。輝が決めなさいよ。」

小声だがたぶんおばさんには聞こえているに違いない。しかし、葵の時といい、名前がないなんておかしいんじゃないのか？俺としてはなかなか考えるのが難しいのだが……

「……で、その子の名前はなんていうんだい？輝、早く言わないと私は家に入るよ。」

「ああつ、加奈です！！加奈って名前なんですよ。」

かみなりの一文字目と三文字目をとって加奈……。ああ、慌て考えたがなかなかいい名前に違いない……。と思う。

「そうかい、じゃあ、さつさと風呂に入っちゃまいな。そんな泥だらけでずぶ濡れの格好を女の子にさせるもんじゃないよ。」

そういえば俺と加奈の体はすごい汚れようだ。特に俺の服は加奈の電撃で思いつきり黒くなっている……。いや、そういえば俺の着ている服は黒色だったか。

「はい、じゃあ俺が先に入りますね。」

「おまえは馬鹿か？まずは汚れている女の子を先に入れるもんだろう！！」

はい、それはわかりましたが……。俺の顔にパンチをしないでください。

「は、はい。わかりました。」

葵が風呂の準備をしていてくれたのですぐに入れそうだったのだが、先に加奈が入ることになったので俺は汚いまま家の周りでストレッチをしている。

「わんわんわん！！」

「あー、うるさいわい！！」

庭にいる犬（名前はホワイトイーという画からだの色は真っ黒だ。性別はメスらしい、俺にはほえまくりである。）が今日も俺に異議を申し立てている。

「わんわんわんわん、ホールインワン！！」

「犬はしゃべっちゃ駄目だろ！！」

暇なのはわかるが意味のわからないボケはやめてほしい。俺は今、かなり疲れているのだ。

「輝さん、次いいですよ。」

「わかった。」

俺にほえまくっている犬を無視して風呂場に向かった。まったく、俺より後にこの家にきたくせしてなぜ俺だけに冷たくあたるんだか？ああ、できれば猫がいいなあ。

がらあ

「!？」

「うわぁ、なんだ、加奈がまだ入っていたのか……。早く着替えるよ。」

「このスケベエ！さつさと出ていけえ！！」

「……ふん、見られて恥ずかしい体になってその台詞を言いやがれ！！」

俺はさつさと扉を閉めてその場を離れた。もしかしたら電撃が俺を襲うかもしれないと思ったからである。そして、俺を襲ったのは電撃ではなく、おばさんの鉄拳であった。

「……いいかい、輝、絶対に女の子にそんなことを今度から言っちゃだめだよ？もし今度そんなこといったら私がお仕置きするからね？きちんと加奈に謝っておくんだよ。」

腹にめり込んだその一撃の効果は麻痺効果だったようだ。俺はその場で悶絶してしまいおばさんは俺を踏んでどこかに去っていった。風呂場の扉が開き、中から加奈が姿をあらわした。

「自業自得よ、輝……」

「……加奈、すまんかった。」

ここは素直に謝ったほうがいいだろう。この一撃は死にはしないだろうが予定されている寿命が早まっていく気がしてならない。見事に急所にあたっている。

「もういいのよ。それより大丈夫？」

ふ、なかなか優しい所があるじゃないか……。俺は壁を支えにしながら立ち上がり加奈に首を動かすだけで返事した。そして、扉を閉める。

「はあ、やれやれだあ。」

今日は厄日だ。ついてない。きつと今日の正座占いは間違いない。ワーストワンはかに座に違いない。ああ、そういえば葵もかに座だったかな？ あいつもなんか悪いことでもあったのか？

「さて、体でも洗うかな？」

「輝さん、石鹼はこいですよ。」

「おお、ありがと葵。気が利くな……？」

あ、あれ？なんで……なんで葵がいるんだあ！！！！

「どっどっどっどっどっどっしてここに薬があるんだあ！！」

「輝、うるさわよ。」

「あ、加奈すまん……？」

「あれ、おかしくないか？・・・なんで加奈までいるんだよ？」

「どうしたんですか、輝さん？ 顔が真っ赤ですよ？」

「ちよつと湯船に長くつかりすぎじゃないの？ちよつと体を冷やしたほうがいいわよ？」

「・・・あ、ああ。じゃ、さきにあがることにするわ。」

な、なぜこんな・・・穴があつたら入りたいような状況になつて
いるんだ？

俺はとりあえずこの危機的状況から脱出するために脱衣所へと逃げ出したのであつた。まあ、あれだ・・・こういうのはいけないことだと思つし・・・いや、いたほうがいいのかもしれない。

「よ、輝。楽しかったかい？」

脱衣所にはおばさんがニヤニヤしながら立っていたのであつた。
犯人はあんたかあ！！

二匹と数えるべきか二人と数えるべきか・・・（後書き）

さあ、まだまだ土俵にも上がっていませんが・・・まだまだが
んばっていききたいと思います！！読んでくれる人がいる限りがんば
りたいと思います。

スタートラインにはまだ足りない！！

八、

「まさか二人が入ってきたのに気が付いていなかったのかい？」

ぐ、普通にあの二人は入ってきていたのか？考え事をしていたのでまったく気が付かなかった。これは俺が悪いのか？

「・・・おばさんが仕掛けたんですか？」

「そんなことするわけじゃないか。あの二人が自ら言ってきたんだよ。」

え、そんなことってあるのか？クラスの中で唯一彼女のいない俺のために神様が与えてくれたイベントか？

「ほら、鼻の下を伸ばしてないでさつさと朝飯を食べてくれないか？」

「あ、は、はい。」

俺はさつさと着替えて一人で先に朝食を食べに行った。ちなみに今日の朝食は卵かけご飯であった。

朝食も食べ終わった後、おばさんのところに向かった。おばさんの家に伝わるらしい、なんだかわからない格闘技を教えてもらったのである。

「さて、おまえはまだまだ基本にもたどりつけていないので、今日、それに入りたいと思う。」

「はい、わかりました。」

おばさんは確かに強いが、稽古では俺に何にもしてこない。おばさんが言うには実際にその場でその習ったものを試せということだ。まあ、今のところは町の不良に絡まれたことぐらいしかないからいいのだが、もしかしたら加奈みたいなのがあるかもしれないのでこれから真剣にやっていきたいと思ったのだ。

午前中はその稽古をずっとやり、午後からはおつかいである。

「輝さん、どこに行くんですか？」

「ちょうどいいわ。輝、この町を教えてよ。」

葵と加奈もいつしよについてきた。ああ、なんだか嬉しいきぶんだあ。

「まずはおつかいを頼まれているから先にそつちを終わらせて、その後に加奈たちにこの町を教えてやるよ。」

おばさんから頼まれたものは次のものである。シャンプー、リンズ、卵、トマト……。あと、看板。看板以外は何とかなりそうだが、看板なんてスーパーに売っているのか？俺は一度も見たことがないが……。ああ、なるほど……。これはどこかの道場に行けばあるかもしれないな。売っているかは謎だが。

このとき俺はそんな簡単に考えていたが、甘かった。多分、糖分に換算した場合は間違いなく糖尿病になっていたに違いない。

スーパーで頼まれたもののほとんどを買うことに成功した。このミツシヨンは簡単であった。そして、俺は今、二人に町のいろいろなところを教えている。

「……で、ここが俺がよく行く店かな？」

「へえ、輝さんって本屋によく行くんですね？」

「どうせ、エッチな本を立ち読み、もしくは年齢偽って買っているんでしょ？」

ぐ、うるせえな……今日はあの爺さんとここにお供え物をしようと考えていたが、この二人がいたら不可能だ。今日は諦めよう。

「この町は裏通りなんかはちょっと危険だから二人とも気をつけてくれよ。危ないお兄さんやおじさんについていたらだめだからな？特に、物で釣ってきそうな奴と甘い言葉で誘惑してくるなんて奴は言語道断だ。」

ちよつと、保護者っぽいことを言ってしまったが別にこの二人なら大丈夫だろう。あれ、何でそこで俺を見るの？

「私は物でつられて今、ここにいますよ？」

「私は甘い言葉で今ここにいるわよ？」

あ……。

「……俺は危くない人間だ。」

「どうでしょうかね？」

「そうよね、あやしいもんよ。」

ぐ、返す言葉がみつからねえな。いや、俺は安全な人間だ！！
とりあえず本屋から離れてとある方角に歩き出す。安心してほし
いが別に路地裏に行くわけではない。俺が一度も来たことがない
ところである。おばさんから昔聞いた話だが、そこら辺にはいろいろ
な道場があるらしい。もしかしたら看板が売っているかもしれない。

そして、俺は目に入った道場に適当に入った。多分、ここまでは
良かったに違いない。この後の行動が間違いだったのだ。

「すいませーん、看板ください！！」

謎の拳法や木刀を振り回していた人物たちの視線が俺に突き刺さ
る。間違いなくこの視線は俺を敵と分析したに違いない。なぜだ？

「……輝さん、なぜこんなところで道場破りなんてするんです
か？」

へ、道場……破り？

「ほら、ここのボスみたいなやつが輝のところに来たわよ。がんば
ってね？」

加奈が指差す方向には熊のような男がこっちに歩いてきていた。

その目には間違いなく獲物を狩るときの熊の目をしている。

「ほう、貴様みたいな貧弱な野郎が俺たちを倒しにきたのか？・・・
試してやろう！！」

思いつきり振りかぶった拳を俺の平均的だと思っている顔に・・・
いや、やはりあんなばんちを食らったら間違いなく今より酷い顔になるに違いない。だが、おばさんのものよりスピードは間違いなく遅いので対処可能だ。軽く右に重心を傾けて・・・相手の手を引きカウンター！！

「てりゃあ」

「ぐ・・・」

掛け声がしょぼいのは仕方がない。俺はかつこいい掛け声なんて思いつけないのだ。誰かが教えてくれるのならぜひともそれを使わせてもらいたい。まあ、とりあえずは相手の・・・なかなかごつい顔に渾身とはいかないが結構威力のあるだろう一撃を食らわせることに成功した。相手は床に倒れ動かなくなった。

「せ、先生！！」

「大変だ！熊先生がやられたぞ！！みんな、今のうちに逃げるんだ。」

うわっ、先生を見捨てて逃げていったよ。道場の反対側の扉を開けて少数ながらいたこの門下生であろう人物たちは我先にと逃げ出してしまった。熊先生と呼ばれた人物はやってきた襲撃者の気を引く材料とされてしまったようだ。・・・襲撃者であろう俺とし

てはこれは人道に反すると思うがね・・・。

「・・・ふふ、完敗だ。貴様に看板をくれてやろう・・・だが、最後に名前を教えてほしい。」

「えーっと、白川 輝だ。」

「そうか。」

未練がなくなっただのか熊先生という人物は再び気絶してしまったようだ。これで間違いなく俺の夢に出てくることはないだろう。化けて出てくるのは俺の爺さんだけで十分だ。

「さ、そろそろ帰りましょうか？」

「輝、いつまで突っ立ってるのよ。看板はもらったんでしょ？」

俺は気絶している人物に向かって手を合わせてその場を去った。

スタートラインにはまだ足りない！！（後書き）

ここでこれからの進路予定ですが・・・そろそろ学校に行くべきではないかと思いました。学校で一暴れ。いや、窓を破ったりするわけではありますので安心してください。

シリアス展開を望む御爺様

九、

看板を俺が背負い、葵と加奈がそれぞれ小さなスーパーの袋を持っている。手伝ってくれるのはうれしいが俺としてはこの重たい看板をどうにかしてほしい。

「意外と強いよね？見た目はちよつと細いけど・・・」

「別に強いわけじゃねえよ。たまたま偶然のラッキーだったのさ。」

勝負事なんか運で決まると俺は思っている。その場の状況、天気、今日の運勢で人生なんて変わってしまうものだ。

「だけど、怪我しなくてよかったですよ。」

ああ、心配してくれてありがとよ、葵。おばさんにそんなこといわれたことなんて一度もないからなあ。いつも怪我した時はおじさんがしてくれるし・・・。

「葵、ありがとな。」

「いえいえ、同じ屋根の下に住むもの同士、心配するのは当然のことですよ。」

「わ、私だつて心配したのよ？」

「ああ、加奈もありがとな・・・」

加奈は確か俺にがんばれといってくれたからな。

「……ところでさあ、二人とも看板なんて何に使うと思う？」

俺がふとした疑問を二人に聞いてみると葵と加奈は考え込んだ。
凄く考えようである。たとえるなら、解く事がなかなか難しい数学
の文章問題を先に解いて先生に誉めてもらおうといった感じである。
いや、真剣に考えてくれるのはうれしいのだが、そこまでする必要
はないと思うのだが……

「……まな板ですかね？」

「……いや、表札を作るのよ!!」

前者なら、別に看板を買ってこいとは言わないだろう。そして後
者なら、こんなでかいもんはいらんだろう？

二人は俺の顔を見ている。何かを期待しているのはわかっている
のだが……このどちらかを正解にするのはちょっとおかしいだ
ろうな。

「……いや、俺は……コレクションだと思う。」

二人は俺の顔をじつと見ている。俺としては思いつきりボケてみ
たのだが、もしかして滑ったか？

「ああ、なるほど……流石輝さんですね。考えることもできませ
んでしたよ。」

「輝にしてはやるじゃない……今度なんか問題があっても絶対先

に解いてやるからね!!」

この二人は天然かもしれないな。まあ、答えは家に着いておばさんに聞けばわかるんだがな。そろそろ家につく頃だし。いや、また家の前におばさんが立っていた。

「おかえり、思ったより遅かったじゃないか？」

「いや、実はシャンプーとリンスの違いをこの二人に聞かれたんですよ。」

あの時はかなり苦戦したぜ。ふ、熊先生という人物より強敵だった。

「まあ、看板はあっさりゲットすることができたのでよかったですけどね。」

「そうか、では明日から週に一回は看板を持ってきてくれよ。あれは私のコレクションにするかね。」

うわ、俺の感があたってしまった。どうしたもんかね・・・。

「ああ、それといい忘れたが看板をもらいに行くときは必ず誰かと二人で行くことだ。この約束を破った場合はさて、どうしてやるのかね？」

おばさんの怖いところはあえて何もいわないところだ。他の人はどうか知らないが俺はそんなことをされるとかなり心が不安定となる。

「……それとな、今から山に行ってもらいたいんだが……」

おばさんがここまで俺にお使いを頼むのはちょっと危険視したほうがいい兆候だ。看板どころかどこかの首領の首でもとってこいといわれているようなものでもある。

「場所はどこですか？」

まあ、俺としてはいろいろとお世話になっているのは間違いないのだから俺のできる範囲ではできるだけしているのだ。うんうん、どうせ今回もろくなことがないんだろなあ。

「……ほら、この町の近くにあるあの山だ。言っておくが輝一人だけで行ってもらう。で、とあるものをとってきてもらいたい。」

俺の住んでいる町のかなり近くに山がある。しかも俺の家から結構近くといっても距離があるのだが……。まあ、いけない距離ではない。そして、おばさんが俺に頼んだものは山の頂上にあるらしい小屋に忘れてきた水筒だそうだ。

「じゃ、行ってくるよ。葵、加奈。」

「はい、いつてらっしゃい。」

「変な人物についていたらだめよ？」

その返事に苦笑しながら俺は自転車にまたがり家を後にした。まだ、夕日ではないくらいなのでもしかしたら早くに帰れるかもしれない。なかった。

すこしかかって、獣道から山に登ることにする。おばさんが言うにはこの道が一番の近道なのだそうだ。だが、山をなめてはいけない。今はまだ結構明るいがもし、暗くなってしまったら迷子になってしまう可能性もある。

そして、あっさりと俺は迷子になった。しかもまだ明るい。

「……さて、どつちからきたかな？」

何の鳥だかわからない泣き声を聞いたりしているがゆったりとしている場合ではない。すでに遭難しているのだ。こうなったら耳を研ぎ澄まして川があるとところを見つけて下っていこう。そうすればいずれ町にたどり着くに違いない。いや、そうであってほしいものだ。

川の流れる方向に歩いていくと……不幸なことに頭上の木が折れたようで、かわすことのできなかった俺はそれをもろに食らって意識を遠いかなたに飛ばしてしまった。

「はあ、あっさり輝は死んでしまうのお。これで二回目じゃよ。」

「……人間って意外にもろいんだな、爺さん。」

「まあ、そんなもんじゃ。どうじゃ、また生き返らせようか？それともわしと一緒にきてハーレムを満喫でもするか？最初に言っておくが天国はわしの領土じゃからおまえには地獄に行ってもらうがな。」

「ぜひとも生き返らせてもらいたい。まだなあんにもしてないんだ
！！それはそうと爺さん、聞きたいことがある。」

「なんじゃ？天国のおねえさんの平均的なスリーサイズか？悪いが
まだ、わしも把握してない部分があるから残念じゃがすべてを教え
てやることなんてできないぞ？」

「いや、そうじゃなくてだ。いったい竜が何で女の子になるんだ？
それが疑問でならん！！」

「・・・いいか、輝。言葉は知っていて初めて意味のなすものとな
る。知らなければ意味がないからなあ。おまえは知ろうとしない、
もしくは知っているのに気が付いていないだけじゃ。それに、そう
いうことは生きている誰かに聞くことじゃ。さて、なぜなぞはこれ
で終わり。さらばじゃ。・・・礼を言うぞ輝。今回はシリアスな
おじいさんを演じることができた。」

「よく言っぜ、まったくいつもとかわらないくせして・・・」

そして、俺はこれ以上何も教えてくれないだろうと思われる爺さ
んと別れたのであった。

シリアス展開を望む御爺様（後書き）

ここで予告しておきますが・・・まだまだ竜は出ると思います。
いや、二桁になる可能性は余りありませんが・・・少なくとも後、
二匹？は出ると思います。

白衣が似合うお姉さん！

十、

気が付いたらいつかと似た状況に陥っていた。目の前に大蛇がいるのだ。いや、現実逃避はやめておこう……。その竜は俺を見ている。もし、もしもだ……。この竜がお腹を減らしてた場合は餌となるのは間違いなく俺となるに違いない。ここにはパンもないのだ。

じーっ。

ああ、この山には竜もいたのかあ。すっげえ、危険だったんだなあ。何で誰も気がつかなかったんだ？あ、なるほどお、考えられることは一つ。会ってきた人間をその場で刺身かなんかにして食べてしまったに違いない。だから誰も竜がいることに気が付いていないのかあ。

「……この世に未練はない！！だが、最後に葵と加奈が気づいていない俺の大切な本をどうにかしたい！」

あれは二人にはちょっと刺激が強すぎる本だと俺は思う！！いや、事実俺にも刺激が強すぎるのだが……。いや、まあ、竜を見れたのはとてもうれしい。竜は新緑の体をもてあましているのか尻尾を振り振りしている。その目はつぶらで……。動物の好きな俺にはたまらなく可愛いと思ってしまった。ああ、見ていて癒されるなあ。鱗も結構かつこいいというか……。ぜひとも触ってみたい。

「触っていいか？」

竜はその穏やかだった眼を鋭く細め俺を見た。これは間違いなく否定の行動に違いない。

「いや、傷つけるつもりはないんだ。結構手入れの行き届いたうろこがどんな感触をしているか不思議に思っただけだから・・・」

竜に喧嘩を売ったらどうなるかは加奈のときによくわかった。てか、さっきまで死んでたらしいし・・・そういえば、上に乗っていた木がなくなっていることに気が付いた。

「・・・もしかして、お前がどかしてくれたのか？」

竜はその長い体を俺に近づけてきた。だが、いつでも俺を単なる肉にできる用意はしているようだ。竜はそうだというような目をして俺を見ている。

「そうか、ありがとな。」

もうそろそろ、夕焼けが沈もうとしている。とりあえず今日は帰ったほうがよさそうだ。竜が道を知っているかはなぞだが・・・俺は尋ねることにした。

「人里に降りる道を知っているか？」

竜は口をあけて俺を捕まえた。いや、これってもしかして食われるか？なんか俺悪いこといったのか？

どうやら何かを俺に求めているようだ・・・。なんとなくだが分かる。そして、竜はくわえていた俺を近くにあった木に思いつきりぶつけたのであった。あたったところは頭で俺の意識は先程戻ったばかりなのに再びどこかかなたに飛び去ってしまったのである。

ああ、俺って何回こんなことに陥っているのだろうか？

「お前さん、そんなに死にたいのか？」

「いや、今回は間違いなく殺されただろう。別に俺は無駄死にがしたいわけじゃないよじいさん。」

「まあ、とりあえずはどうしたんじゃ？今度は地獄のトラパンのお姉さんのスリーサイズでも聞きに来たのか？こっちは大体わかるぞ？」

「・・・威張られても困るがな・・・なあ、こ前教えてくれたあの呪文はいつたいなんだ？」

「・・・さあ？わしはぜんぜん分からんぞ？」

「・・・へ、まあいいや。『我が名において命ずる、真の姿を見せよ。』・・・これでよしと。」

「輝も大変じゃのう。ハーレムでも作る気か？」

「・・・そんな気はない。あばよ爺さん。」

辺りはすでに暗くて完璧に遭難だ。どうやらさっきぶつけられた木に背中を預けているようだ。

「・・・うう・・・」

頭が痛い。手で触つてみると・・・イチゴジャムがついてしまいました・・・いや、俺の血だけだね。

「すみません、ちょっと強く木にあてすぎました。てへっ！」

そういつて俺の前に姿を見せたのは白衣を着て眼鏡をかけている清楚な女性だった。いやあ、傷の痛みを一瞬だけ忘れてしまったね。

「あなたは・・・？」

「輝君を木にぶつけた犯人でえす。」

暗がりながらも彼女の顔が見えるのはまだかすかに太陽が沈んでいないからかもしれない。ああ、今日の晩御飯はなあんにもないなあ。こんなことになるなら何か持つてくればよかった。いや、そんなことよりこの女性に聞きたいことがある。

「あの、名前は何ですか？」

「名前ですか？輝君がつけてくれるんでしょ？」

やっぱりだ。竜から人間みたいになつたら名前がないんだ。いや、たぶんもとから名前なんてないのかもしれないなあ。さて、なんて名前を付けようか？腹が減ってまったく頭がまわらねえ。

「・・・碧さんでどうですか？」

「ああ、いいですねえ。輝君、これからよろしくお願いしますね。」

・・・ははは、これで三匹目？か。ついているのかいないのか・・・どっちだろうねえ。誰か教えてほしいよ。

「碧さん、どこか寝るところありませんか？できれば屋根つきの小屋とか見たことありません？」

「ああ、それならいい物件を知ってますよ。ついてきてください。」

頭からの出血は止まったようだ。よかったあ。まあ、今はこの人に付いていくことにしよう。いや、危ない大人についていくのは危険だが・・・

「さあ、ここですよ。」

碧さんが案内してくれた場所は洞穴みたいな場所であった。文句を言っている場合ではないので今日はここで夜を明かさなければならぬ。今日はもう、やる事がないので寝ることにしよう。羊でも数えていれば早く夢の世界にいけるはずだ。

「輝君、もう寝るの？」

「ええ、今日はいろいろあつて疲れましたからね。」

「じゃ、私もねよつと。」

碧さんは俺の隣に寝転がった。床はちょうど乾いている石であったのでぬれていない。いや、まあ、一緒に寝てくれるのは正直ありがたい。こんな暗闇の中で一人で寝たくないのだ！！別にやましい気持ちはこれっぽっちもないぞこの野郎！！

「いやあ、久々に会った人間が輝君みたいな人でよかったよかった。それに食べちゃいたいくら可愛いからねえ。」

俺はその台詞を聞いて背筋が寒くなった。やっぱり一人で寝たほうがいいのかもしれない。

白衣が似合うお姉さん！（後書き）

さあて、とうとう三人目の登場です。基本的にはあと一人？（いや、一匹か？）出したいと思っています。まだまだがんばっていきたいと思います。

嬉しさと恐怖の入り混じった朝

十一、

俺の顔に何かがあたっている。それはなんだかやわらかくて暖かい。ああ、いつまでもこのままでもいい……って、いつててて！

「……………」

目を開けるとそれは碧さんの胸であつた。いやあ、機能は気がつかなかったが意外にでかいねえ。俺の体を抱きしめるようにして眠っている。いや、実際頭が痛いのは碧さんが俺の頭に噛み付いているからだ。

がしがじ……

なおも俺の頭に噛み付いている碧さん。顔が碧さんの胸にあるので声を出することができない。このままでは本当に食われてしまうかもしれない。

「……………ん？まずう。」

そういつて碧さんは俺の頭をかじるのをやめた。確かに俺の頭をかじってもおいしくないだろう。俺としては今、おいしい体験をしているんだけどね。

「んんっ……………朝か。輝君、起きて下さい。朝ですよ。」

もうちょっとこうしていた。

「……おきないと頭噛み千切るかも……」

「はい、碧さん、おはようございます。」

さっきまで実際にしていたので彼女の言っていることがうそに聞こえなかった。今、起きなかったら間違いない彼女の朝食になった可能性もあったかもしれない。

「それじゃあ、輝君の家に行きましょうか？道路までの道なら私が案内します。」

「ええ、お願いしますね。」

「はい、お願いされます。」

彼女は近くに置いていた眼鏡を装着して俺の前に立って歩き出した。いやあ、その腰まである長い髪の後姿はなんだか見ているとばちがあたりそうだなあ。

「……あいたあ……」

俺は案の定、近くにあった石につまづいて転んでしまった。いかにいかに、何を考えているんだ!!

「大丈夫ですか？ここらは石が多いので気をつけてくださいね？」

「……はい、今後は気をつけることにします。」

俺は今度は下を見て歩くことにした。失敗したらその教訓をもとに今後の行動に気をつけなければならない。綺麗なお姉さんの後姿をばけつとみている場合ではないのだ。仮にも遭難している状況だし……

「輝君、後ろにくつついて歩かないでくれるかなあ。歩きづらいんだけど……」

「あ、すいません……」

俺としたことが集中しすぎてかなりの速さで碧さんの背中にくつつきながら歩いていたようだ。なぜ気が付かなかったんだ？ 普通は気が付くだろうに……。でも、やっぱりやわらかかったなあ。家にいる二人にはほとんど触れた事がないからわからないし……

「って、何を考えているんだあ!!」

「? どうかしましたか。」

「い、いえなにも……」

あ、あぶなかったあ。心の雄叫びがつつい口から出てしまった。やれやれ……

「さ、ここからが道路ですよ。」

碧さんの指差すところには昨日、俺が置いてきた自転車が主人の帰宅を待っていてくれた。よかった、変な大人に連れ去られなくて……

「自転車があるのなら、二人乗りができますね。ちょうど荷台もありますよ。」

そういうと、俺より先に荷台に飛び乗り、俺が乗るのを待っている。できれば二人乗りなんて危ない真似はしたくないのだがしょうがない。

「さ、すっかりつかまっててくださいよ？」

「はい、輝君。」

ああ、背中にあたる感触が気持ちいいなあ。・・・さて、そろそろ行きますかね？俺はペダルを思いっきりこぎだして山道を降り始めた。

そして、家が見えてきたのだが・・・ちょっと困ったことになっているらしい。いや、なぜそう言われるかというと・・・家の前でおばさんと葵、そして、加奈が腕組みで待っているのだ。怒っているのは間違いないだろう。ここは反省しているような顔をするしかない。

「・・・心配かけてすみません。」

彼女たちの目に俺の姿が捉えられた瞬間、俺は自転車から降りて頭を下げた。

「・・・ほお、朝帰りで女を連れて帰ってくるのがおまえの反省した姿かい？」

おばさんの言うとおりである。こればかりは説明のしようがない。こまったものだ。

「さて、輝の話を聞かせてもらおうか？その女のことについても私たちが納得するまでじっくりとね……」

俺はおばさんと葵、そして加奈に連行されたのであった。

約、90パーセントの事を（朝の事は言っていない。）喋り終わり俺は三人の顔を眺めている。おばさんには一応、彼女が竜であることを話しておいた。ついでに他の二人が竜であることも素直に打ち明けた。

「……なるほど、輝は机の裏にある本以外にも私に隠し事をしていたのか？」

「いや、何で知っているんですか？」

「まあ、葵と加奈が人間ではないのは知っていたし……お前さんの横にいる姉ちゃんも人間ではないのはわかった。で、お前はどつしたいんだい？」

俺はこのときようやく、おばさんがもしかしたら爺さんから何か教えられているのかもしれないと思った。これぞ、探偵への第一歩……かな？

「爺さんから何か聞いてませんか？俺の事や竜のことを……」

「ああ、おまえの爺さんからはいろいろと頼まれている。だが、それをお前に教えることはできない。」

「……なぜですか!!」

ついつい俺は聞き返してしまった。だって気になるだろう。

「理由ならある、お前がまだまだ子供だからさ。さて、今回はここで終わりだ。また今度な。」

「……はい、ところで碧さんはここにいていいんですか？」

「ああ。好きにしな。」

おばさんは別に碧さんがこの家にいてもいいらしい。その事には別に文句を言わなかった。しかし……さすがに俺の部屋に四人はきついかもしれないなあ。どうしたもんだろうか？

「ああ、輝はあとで新しい部屋に案内してやるよ。」

あとでおばさんに案内された部屋は二階の物置部屋であった。

嬉しさと恐怖の入り混じった朝（後書き）

さあて、ちょっと話が進んだと思っている今日、この頃です。まあ、実際のところはあんまり進展してませんがね。ま、これからもがんばっていききたいと思っていますので、できましたら応援よろしくお願いします。

勢力、拡大中！

十二、

「・・・・ふあああ。」

目を覚ましてあたりを見渡す。まだ少し暗い。だが、そろそろ起きる時間だ。学校に行く前に走ってこないといけない。俺は布団から抜け出して制服を探す。

「ああ、そこにあつたのか・・・」

埃かぶったダンボールの上においてある俺の制服を摘み上げ、おまけとしてついてきた埃をはらう。俺の部屋はまだ掃除が終わっていないので埃だらけだ。このままこうしていたら間違いない埃アレルギーになってしまう。

着替えて一階に向かうとすでにおじさんは仕事に行っているらしく、姿が見えない。起きているのはおばさんと俺だけだ。

「・・・・輝、おはよう。」

「・・・・はい、おはようございます。」

俺の今日の朝食はパンとサラダとetcである。それをさっさと食べ終わり、学校に向かう。

「いってきます。」

「ああ、そう言えば今日は転校生がくるかもしれないと右隣のおば

さんが言ってたぞ?」

おばさんが言った事を深く考えずに走り出す。おばさんは冗談を言うのが大好きだ。

チャイムがもう少しで鳴るところで学校についてみるとこの前同じクラスとなった奴が俺の近くによってきた。(中学の頃から俺はいろいろと他校に行ったことがあるのでクラスの男子のほとんどと知り合いだった。)どいつもこいつも休日は彼女とデートの約束があるとかで俺の遊びの約束を足蹴にしゃがった薄情な野郎どもだ。

「・・・白川、今月中に転校生が来るらしいぜ? まあ、そんなことより聞いてくれよ、昨日のデートは結構いい雰囲気だったぜ。」

「・・・ふん、うるせえよ。俺には関係ないことだ。」

こいつは中学の頃から友達だったやつで常に何かを俺に自慢してくる嫌な奴だ。こいつの名前など教えておかなくてもいいと思うのであえて名前は伏せておく。

「しかしまあ、お前は鈍いやつだなあ。この前の昼休みだっていると見られてただろう?」

「上級生のこわーい、お兄さんがたにか?」

「いや、違っつて・・・。クラスの女子からだよ。」

「・・・俺はまだ何か犯罪的な行為は行っていないはずだぞ? なぜそんな睨まれるような事にならないといけないんだ?」

「だから鈍いつていわれるんだよ。」

へ、勝手に何でも言いやがれ！！どうせ俺にお似合いなのは恐い顔した連中さ。だが、腹いせとしてそんな連中に手を出すと後でおばさんに何をされるかわからない。

キンコーンカーンコーン

「はい、皆さんごきげんよう！！」

チャイムと同時に飛び込んできた人物は白衣を着ていた。一瞬、俺の目がおかしくなったかと思った。

「君たちの元担任は行方不明となったので私が代わりに先生となりました。名前は緑山 碧でえーす。理科の担当をさせてもらってますのでよろしく願いしますね？」

クラス一同、ぽかーんとしている。ちなみに言うなら俺がその中でも特に驚いている。だが、驚きはこのままでは終わらない。

「さて、今日から皆さんの仲間になる人物が二人います。さ、二人とも入ってきてください！！」

一人目はポニーテールをしている女の子で二人目はツインテールをした女の子であった。この時期に二人の転校生・・・ありえる確率はいかほどのものだろうか？俺はそんなこと考えずにただただぼさつと教壇を見つめていた。

「青柳 葵です。みなさん、よろしく願いしますね？」

「新原 加奈よ。よろしく。」

「さあーで、二人の席は……まあ、空いている席にちゃちゃつと座ってね?」

空いている席などないと思われたが……いつのまにか俺の席の近くに設置されていた。うわぁ……これはどういった状況だ?

「碧さん、これは何かの冗談ですか?」

「輝君、先生に向かって何を言っているのかな?ちゃんと碧先生と呼んでくださいね。」

「……碧先生、これは何かの冗談ですか?」

俺の質問に何人かの生徒が頷く。

「いえ、そんなことはありませんよ。さて、ちよつと輝君には後で話があるので職員室に来て下さいね。あ、後は転校してきた二人もついでに来て下さい。これで朝のホームルームを終わります。」

そういつて白衣の似合う先生は教室を出て行った。俺はしょうがなく、二人と共に教室を出て振り返り二人に聞いた。

「……なにがあつたんだ?」

「さあ、それが椎名さんが昨日、学校に私たちを連れて行ったんですよ。」

椎名とはおばさんの本名だ。いや、多分これも偽名と思われる。去年までは美香と名乗っていた人なのだ。

「椎名さんはこの学校の理事長と知り合いらしく……とりあえず輝の動向を気にしろといったのよ。」

「……俺の生活は監視されているのか？」

「まあ、今は碧さんのところに向かいましょう。」

「……ああ……」

俺はため息を出したい衝動に駆られながらも廊下を職員室に向かって歩き出した。まあ、別にいいだろうな。

碧さんからはおばさんからのきまりを言われるだけとなった。といっても、遅刻をするなど授業中に寝るなどの二つだけだったが……。

「白川、あの二人と知り合いなのか？」

「ああ、ちよつとな……。」

俺は今、くたびれて机に突っ伏している。今日の朝に走った距離が長かったのかもしれないがそれだけではないと思われる。そして、今日の朝おばさんが言ったことを思い出した……。

「なるほど……だからあんなことをいつてたのか？」

そこまで思い出してはつとなつた。俺の家の右隣は空家だったはずである。なぜそんなことをいったんだ？

「しかし、おどろいたなあ・・・転校生が二人も来るなんてなあ。しかも今日だし・・・」

「そうだなあ・・・俺は明日だと聞いたんだが・・・」

さらに俺の周りに男子が集まってきていろいろと話し始めるのであった。そして、俺はなんだか奥歯に魚の骨がつまったような顔をして考え込むのであった。俺の考えていたことが現実になってしまったときはちょっとびっくりした。

襲撃者の少女

十三、

三人が住所、年齢、過去を偽装してしまった一日目は意外とあっさり過ぎていった。それに関しては何も言う事はない。ただ、三人が学校に行く二日目となる朝の出来事が正直びびった。その日の朝、やはりおばさんに朝の挨拶を継いで家を出ると今日は覆面をつけた襲撃者がいた。

「覚悟!!」

襲撃者は手に持っていた木刀で俺の頭に一閃を喰らわせようとする。だが、剣のきれいな切っ先は虚空をかすめ、地面にあたる。意外と……よけるのは簡単だ。いや、縦一閃ではなくて横一閃だったらちよつと俺としては避けづらい。

さて、こういう場合は相手に時間を与えてはいけない。体任せの体当たりは芸がないが健全な生徒を木刀で襲う襲撃者にはうってつけだと俺は思う。といっても、倒してしまえば馬乗りになっているほうに分がある。こうやって組み敷いてから顔を覆っている布を取らせてもらおうか？

「……やつぱりアキは強いねえ。」

布を取った相手は女の子であった。ああ、よくあるよくある。いや、これは俺の過去ではよくあったことだ。

「……穂乃香ちゃん……か？」

「あたりだよ。」

俺は押し倒して馬乗りになっている相手を見る。

彼女と最後に会ったのは小学三年生くらいだったかな？その頃爺さんが死んでしまい・・・俺は今の家にいるのだ。ちなみにいうなら両親が死んだのは小学一年の冬だったらしい。まあ、今となっては知らないがこれは爺さんが言っていたことなので嘘かもしれない。さて、余談はこのぐらいとして俺は気になることがある。

「なぜここに？」

「うん、引っ越してきたんだよ。けどあのアキがこんなに強くなっただなんてうれしいなあ。」

穂乃香ちゃんは遠い目をして話し始める。

「・・・朝行くときは私が木刀を持ってアキをコテンパンにしなから学校に行ってたのにねえ・・・。」

「それは小学二年生までだろう・・・。」

うんうん、なつかしいなあ。穂乃香ちゃんはなぜだか知らないが小学三年になると俺を叩くのをぴたりと止めた。それはそれで嬉しい事だったのだが・・・爺さんから余計にしごかれ始めた。その昔・・・いや、いまもだが俺はなんだか怪しい拳法みたいなものを習っているのだ。

「それよりさあ、そろそろどいてくれないかなあ？」

道行く人たちは俺たちを見ている。そりゃそうだ・・・朝っぱら

から女の子を押し倒している光景だからなあ。

「・・・・・・・・わかったよ・・・・・・・・」

手を貸して立ち上がらせるときに何かが起きた。誰かの考えていることが俺の頭に入ってきたような感覚に襲われたのだ。

押し倒されるならそんな関係になつてからがいいなあ。

いや、ちよつと朝っぱらから誰がこんな危ないことを考えているんだ？誰だ？そしてこんなことが前にもあつた気がするの俺だけか？

「・・・・・・・・アキは・・・・・・・・ちよつと失礼だね・・・・・・・・」

穂乃香ちゃんは俺を睨むような目で見ている。その目には少々、恥ずかしそうな顔が入り混じっている。

「私のこと胸が小さいつて思っているでしょう？さっき伝わってきたよ。」

「え・・・・・・・・えええ！！」

いや、確かに小さいと思つたけど・・・・・・・・口に出してないし・・・・・・・・もしかして・・・・・・・・さっきあんなデンジャラスな事を考えていたのは・・・・・・・・目の前にいる小さい胸の女の子なのか？

「あ、また思つたでしょ？」

いまだに手を持たれていたので俺はさつさと手を放した。そりゃ

そつだ・・・これ以上変なことが相手に伝わったりしたら間違いく目の前の少女は俺に襲い掛かってくる。

「さ、早く学校行こうよ？」

「ああ・・・わかったよ。」

先に走り出した幼馴染を追っかけていこうとして気がついた。なぜだかほっと思ひ出すことができないのだ。彼女との思ひ出は木刀で叩かれていた事ぐらいしか頭に浮かんでこない。

「・・・アキ、あぶないっ！！」

ぶっぶー

道の真ん中で突っ立っていたのが間違だったようだ。俺は右から迫る車にはねられてしまった。

車のスピードはあまり速くはなかったが俺の体は中を舞い、近くのガードレールに頭からぶつかってしまった。いやいや、ほんとについてないねえ。

道を渡るときはすばやく、注意してわたろうね？

「・・・今度は交通事故か？いいご身分じゃのう？」

「うるせえ。ちょっと思ひ出してただけだ！それになんとか知らないが俺は穂乃香ちゃんとの思ひ出を思ひ出すことができないんだよ。」

爺さんはおもく頷き、何かをしやべり始めようとしたのであった。
（今日はなぜだか今までのように白い着物を着ておらず、アロハシ
ヤツであった。）

「・・・じつはなあ、わしがすばらしき世界に旅立ったあと、わし
は思い出したのじゃ。」

「なにを？」

「わしがよく見ていたビデオの隣にな・・・面白いものがあるのじ
やが・・・」

「どうせスケベビデオだろ？」

「いや、それはわしにしては珍しい、ものであった。おまえの小さ
い頃のビデオじゃ。ある人物がお前の24時間を撮影しており、何
があつたのかもわかるという、すぐれものじゃ。」

「・・・俺って監視されてたのかよ？」

「まあ、爺のお節介じゃよ。そんなことより、今、ここに天使のお
姉さんに準備してもらったビデオがある・・・。」

「よし、早速見よう!!」

「わかったわかった。それ・・・」

「ぼち!!」

「・・・爺さん、ちょっとこれは違うんじゃないか？」

「すまん、これはわしのお気に入りの一品じゃった。おお、こつちじゃった。」

「・・・全く、何文章でも表現できない危ないビデオを俺に見せてんだよ。」

「まあ、これもわしなりのユーモアじゃ。きっと輝も大人になつたらわしのようなかつこよくてもてのいい男になるぞ?」

「・・・いや、いまだに女子と話したことはほとんどないからわかんねえな?」

爺さんは黙つてそのままビデオをセットし、スイッチを押した。今度は間違いないようだ。

輝の過去は前編だけ？

十四、

（御爺さんからのお願い　テレビを見るときは離れてみるのじゃよ？）

僕の名前は白川　輝。家には爺さんと一緒に住んでいる。僕の両親は爺さんが言うには死んでしまったそうだ。それ以降、爺さんはおじいちゃんと言うのを嫌がり、じいさんといってくれと頼んできた。だから僕は爺さんと呼んでいる。

「いつてきまあす。」

僕の家の隣は誰も住んでいなくて、幼馴染なんてできなかった。というより、家はなんだか道場みたいなところでよくわからないものを教えていた。

まあ、そんなことより僕は毎日学校に行っている。

しかし、今日はちよつと学校にいくのが遅かったので遅刻しそうなんだけど・・・。

こういうときは裏山を突っ切れば学校に早く着くことができる。爺さんが言うにはこの山は危ないとか言うがどこが危ないのか僕にはわからない。そして、僕は山に小走りで入りさつさと出て行くとした。だが、普段から行ったことのない道だったので迷ってしまい、困ったことになった。うろろろしているとさらに不幸なことが起こった。

赤い蛇みたいなものが僕を見ているのだ。

その蛇は鋭い角が生えていておまけに手まで生えていた。僕はなんだかその蛇がかわいいと思ってしまう、近づいてみた。

じろっ・・・

蛇は僕の身長ぐらいは間違いなくあり、おとなしかった。もとから動物は好きなほうだったのでこんなことができたのかもしれない。僕は蛇の頭をなでた後にその体に生えている蛇のうろこを触った。硬くてなんともいえない感触だったし、初めての体験だった。僕は学校に行くことも忘れてそのまま蛇の体に体重をかけて眠りに入ってしまった。

夢でどこかで見た男の人がいた。その男の人は優しくそうな顔でこういった。

「・・・輝、その年で女の子をくどいちゃだめだぞ？あと、明はボンキュボンな人が好きか？」

「あんた自分の息子に何いつてんのよ？」

隣から女の人が出てきてその男の人に飛びげりを喰らわせた。男の人はそのまま向こうに転がっていった。

「・・・輝、『我が名において命ずる、真の姿を見せよ。』といつてごらんなさい？これを唱えるといいことがおきるわよ？」

「そんな販売セールスみたいな手で僕の子供が騙せる訳ないじゃないか！」

「うるさいわね、別に騙してないからいいじゃないのー！」

その二人は喧嘩をはじめた。見ていて飽きなかったのだが、先程の女の人が教えてくれた呪文みたいなものを唱えてみる。すると、その二人は目の前から消えて、代わりにショートカットの女の子が姿をあらわした。

以上が、僕と穂乃香との出会いである。後半へ続く!!

「爺さん、後編はどこだ？」

「・・・この前、水につけて壊しちゃった。てへっ？」

「まあ、いいや。穂乃香も人間じゃなかったのか？」

「そうみたいじゃなあ。お前さんが竜の心を見ることがたまにあるじゃろ？」

「ああ、さつきもあつたなあ。」

「それはおまえさんに心を許している竜にしかできないことじゃ。おお、そろそろ、お天気ニユースのお姉さんが始まる時間じゃ・・・輝はさつさと浮世に帰れ。」

「わあつたよ。じゃな、爺さん。」

俺は目を覚ます。あたりは真っ赤につつまれている。

「・・・アキ、大丈夫!!」

「ああ、大丈夫だ。いつぺん死んだ爺さんと話してたがな・・・。」

「冗談を言えるってことは大丈夫だね？」

ま、本当のことなんだが別にいいか。そんなことより早くしないと学校に遅れてしまう。こんなところで寝ている場合ではありませんねえ。

「あ、輝さあん!!」

「輝、おいていかないでよ!」

「起こしてくださいよ、輝君。」

俺は後ろを振り返るとそこには三人がそれぞれきちんと制服と白衣を着てこっちに走ってきていた。

「・・・アキ、あの人たち誰？」

「ああ、俺の友達かな？右から、葵、加奈、碧さんだ。」

近くまで走ってきた葵は寝ている俺を起こす。そして、俺に尋ねてきた。

「輝さん、この人、誰ですか？」

「ああ、この人は俺の幼馴染で・・・。」

「香山 穂乃香っています。」

それぞれがそのまま自己紹介し、いや、正確に言つと碧さんは詳しく穂乃香ちゃんの事を知っていた。そりゃもう、好きな食べ物から体重、身長、スリーサイズまで・・・

「・・・先生つてそんなに物知りなんですね・・・プライバシーも意味がない見たいだし・・・」

「ついでに言うなら、コンプレックスは胸の大きさですね？」

穂乃香ちゃんは葵、碧さんを見てぐつと唸った。完璧に負けていると実感したのだろう。だが、加奈を見て何とか自尊心が修復されたようだ。

「・・・輝、何が言いたいのよ？」

「大丈夫、まだ君は幼いよ。」

「余計なお世話よ。」

気を取り直して学校に向かう。だが、歩き出してすぐにチャイムが聞こえてくる。ああ、今日はちこくだあ。

「しゃ、しゃれにならないよ！！転校早々、遅刻だなんて・・・」

まだだ、まだ諦めてはいけない。先生が教室に入る前に滑り込めば何とかなるに違いない！！ラッキーなことに俺たちの担任は碧さんだ！！この人天然みたいなのところがあるからきつと足が遅いに違いない・・・って、はやあ！！

「さあて、今日の遅刻は三人ね？」

「みんな、負けるんじゃないぞ!!」

俺は遅れ気味となっているかなの手を掴み全速力で走り出した。
ああ、朝から全力のダッシュなんてこの先の授業が思いやられるぜ。
だが、俺と手をつないで走っていた加奈は碧さんより早くに校門にはいることに成功した。

「な、なんとかまにあったあ。」

「そ、そうね……」

この学校では遅刻してきたものは掃除をしないといけないらしい、今日の遅刻者は三人。碧さんと、葵、穂乃香ちゃんである。（碧さんは先生の中で最後だったらしい。）

輝の過去は前編だけ？（後書き）

だいたい、後はこのメンバーで行きたいと思います。基本としては・・・まあ、これからは大体あのおばさんがかかわってきますのでよろしくお願いしますね？いや、おばさんの活躍ではなく、輝の活躍ですよ？

道場へのつらく泣きたくなる道のり

十五、

今日もいたって平和に終わり・・・いや、いろいろと騒動があったなあ。中学からの友達が彼女と一日中ラブラブだったので頭にきて悪戯したら本気で襲ってきたなあ。あれは正直びびった。

「輝、これからどこかに行くの？」

「ああ、おばさんが言ってたろ？」

今日は道場を探してみる予定だ。できればこんな時代錯誤みたいなことはしたくないがおばさんのお願い（命令）を足蹴にするのも心を痛める。（ついでに言うなら体もぼろぼろになるに違いない。）

「加奈、悪いけどついてきてくれないか？」

「い、いいわよ。」

加奈は承諾してくれたのでよかった。おばさんが言ってたことは誰かと行けとっていてようなきがするし・・・。

「そんなことより体は大丈夫なの？朝ひき逃げにあったそうじゃない？」

俺を撥ね飛ばしていった車はそのまま行方をくらましてしまったのだ。悪いのは俺なのでここで文句をいっていても始まらないと思うのでそのままにしていっていいだろう。

「加奈、ちょっと先にお礼をさせてもらうよ……。何か食べにいく？」

「え……。二人で？」

「ああ、誰も誘う人いないし……」

加奈は難しそうな顔をしていたが何をそんなに考えているのだろうか？

そして、加奈は俺の前の席でアイスを食べている。いやあ、俺の微妙に薄い財布はそろそろ平地になろうとしている。まさか加奈が頼んだアイスがここまで高いとはまったく思っていなかった。

「……。輝、頼まないの？」

「……。いや、実はお腹がいっぱいだし……」

目の前であんな大きなアイスを食べられていたら俺は腹いっぱいになってしまい、何も頼む気にならない。むしろ頼んでしまったら俺の財布は間違いなく持つていても意味のないものになる可能性がある。いや、絶対だ。

「けど、そのアイスはそんなにおいしいのか？」

加奈の顔はとても幸せそうだった。知り合って……。いや、まだぜんぜん経っていないが……。一番の笑顔だ。

「・・・まあ、誰かと一緒に食べれるからおいしいのよ。」

そんなちよつと背伸びしたような台詞はこの顔からは出されるとは思わなかった。いやあ、生意気な小娘だねえ。だけどとても幸せそうな顔をしているから否定するようなことはできないなあ・・・と、目をつぶって考えていると店内から

「おお!!」

という声が聞こえてきたので目を開けるとそこにはとてつもない量が・・・まだ半分以上残っていたバケツ並みのアイスが消えてしまった。そして、代わりに口の回りをアイスマミレにした加奈が俺の顔を見ている。

「・・・口の周りにアイスがついてるぞ？ほれ、拭いてやるからこつちに顔近づける。」

あえてどこかに消えてしまったアイスに付いては触れないでおう。周りの人たちからの好奇心丸出し・・・特に加奈への視線が鋭い気がする。

「ん、ありがと・・・」

俺は急いで加奈の手を引き逃げるようにその店からでた。今度大食いの店に連れて行ったら面白いかもしれないなあ。俺はそのまま道場の集中しているところに向かって走っていった。

あたりは夕焼けに包まれていた。ついでに言うなら俺を見て回りの大人はひそひそ話し合っている。

「・・・奥様、あれって誘拐ではありません？」

「まあ、恐い・・・警察は何番だったかしら？」

どうやら俺が手を引いているので加奈を誘拐しているように見えるようだ。俺は加奈の歩調に合わせることにした。そして、握っていた手を離す。

「・・・加奈、どうやら俺は誘拐犯のように見られているようだ・
」

「うん、事実輝は私を連れてきたからそうよね？」

近くのおばさんたちが更に声を低くして話し始める。

「・・・・・・・・。」

「・・・ごめん、冗談よ。だからそんな泣きそうな顔しないでよ。」

ああ、マジで泣きなくなってきた。俺っていつから犯罪者のレッテル張られてんだろうか？

「だ、だからほんとに・・・今では輝に会えてよかったと思えているんだよ？」

「・・・・・・・・へっ・・・・・・・・」

男が泣きなくなる時は・・・玉葱を切った時と、股間を蹴られた時、最後に変質者に女と思われて押し倒されたときだと爺さんがいつていた気がする。・・・まあ、それに襲つてもいない相手から犯罪者にされるのもぜひとも加えてもらいたいものだ。

「ほら、手を握ってあげるから泣かないですよ？」

加奈が俺の手を握ってくれた。瞬間、俺の頭に電撃が走った。

やれやれ、輝は本当に高校生かしら？まったく、誰かがいないとすぐに泣きそうな感じだし……。

「加奈、言っていいことと悪いことがあるんだぞ？」

俺はなんだか小学生に泣き虫といわれたような感じになった。ああ、マジで泣きたいわあ。

「……あんたこそなんて思ってたんのよ。私は輝の妹じゃないわよ。」

加奈はそう言いながらもしつかりと俺の手を握ってくれていた。俺には妹も姉も弟も兄貴もないのでこういうのはとてもうれしかった。つつい顔が緩んでしまう。

「まあ、きつとかがわしいことを考えていますわよ！！奥様！！」

「ほんとね！！今すぐ警察を呼ぶべきだわ！！」

俺はこの道を二度と通りたくないと思った。もし今度誰かと手をつないでいたところを見られてしまったら今度は間違いなく警察官がきそうだ。

それから少しして、いろいろな看板を掲げた道場が見えてきた。どれも聞いたことのないものばかりで……ネーミングセンスがいまいちだと俺は思う。

「……さて、どこの看板をもらえばいいんだ？」

「あ、あれでいいんじゃない？」

加奈が指差したところの道場は彼女にとってはいいいところかもしれない。

その名も……『電撃道場』と、見た目的にも派手な道場であった。いや、こんなところの看板なんて俺はいらないと思うのだが？

「たのもう！！看板をよこさない！！」

加奈はさつさと道場の門を叩き、道場破りを宣言している。ああ、このまま彼女に任せたほうがいいのかもしれないなあ。

「……ふ、いいだろう……門をたたいたことを後悔するなよ？」

誰かの声が聞こえてきて、門が自動的に開いたのであった。

道場へのつらく泣きたくなる道のり（後書き）

えーなんだか加奈とあまり関係ないようになっていたので今回、やってみました。どうだったでしょうか？できましたら感想のほうをよろしくお願いします。

飼い犬に手をかまれる……

十六、

中はこの前の道場と打って変わってかなり大きかった。池もあり、鯉が悠々と泳いでいる。

「……ここって道場って言うよりは日本庭園じゃない？」

「言えてるわね。」

そんなことを加奈と話していると奥の扉が開いて誰かがやってきた。

「……ようこそ、私の道場へ……愚かなネズミたちは黒焦げになってもらおうか？」

どっから見ても危険なおいがする人物である。俺としてはこんな相手を持っている看板を持って帰るのは気が引ける。

「君たちには新型兵器の実験台になってもらおうか？ なぁに、痛いと思ってる暇はないように改良されているからね。」

こんな相手と話している時間があるくらいならしりとりしているほうがまだましだ。俺はおもむろに彼に近づきしゃべっているのを承知で頭を思いつき殴った。

「んがぁ。」

「……すいません。看板はもらっていきますね。」

こんな相手ならこの前の道場の何とか先生のほうがかなりましだ。まあ、このまま看板をばくって持って帰ってしまおう。

「加奈、先に看板を持って家を目指していてくれないか？俺は救急車を呼んでおくから……」

「わかったわ。」

俺は道場の中に入り電話を探した。中は外見から想像できないほどに文明化が進んでおり、目を奪われるようなもの結構ある。

「……くくく、自らわなに飛び込んでくるなんて間抜けなネズミさんですね。ここには侵入者を撃退するように作られた『電撃君一号』が多数配置されているですよ。ここに入ってきたものは……」

ぴぴーっ

ばりばりばり……

俺の目の前でこの持ち主は黒こげとなって倒れた。だが、その目にはどうだといわんばかりの色が宿されている。

「……このようになるですよ。がくり……」

うわぁ、きつと彼は今、身を持って自分が作った『電撃君一号』を自慢したに違いない。すげえガッツだ。俺だったらすぐに逃げ出すと思うね。

「つと、そんなこと思っている場合でもないみたいだ。」

俺の周りには数個の侵入者迎撃装置が俺を狙っている。

丸い体の中央には大きなカメラが設置されており、体はプロペラで浮かんでいるようだ。しかし、思っていたみたいに俺に積極的に攻撃しようとは思っていないのか俺の周りを旋回しているようだ。先ほどから頭にはこれ以上近づいたら攻撃を開始するという文字を浮かべている……と、その一個が電撃を放ち爆発した。

「輝、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。多分、」

これで俺たちは間違いなくやつらの敵である。今まではこれ以上の進行をしたら電撃を放つようになったが攻撃をしたのではつきりやつらのおとなしそうな青い目は赤く点滅しており、俺たちをにらんでいるに違いない。

「加奈、走るぞ？」

「え……私走るの苦手……」

そんなことを言う加奈の体を抱えて出口に向かって走り出す。先ほどまで俺がいたところには強力な伝劇が当たっているようで耳を劈く音がしきりに聞こえている。

「……ぐあああああ！！」

どうやらひとつが自分たちの主人に当たったようだ。断末魔のよ

うな叫び声を上げている。まあ、悪いのは俺たちかもしれないが今回だけは大目に見てほしい。

「輝、助けてあげたんだから私のお願い聞いてくれる？」

いやいや、たとえるなら俺ががけに捕まっていたところをお前は俺の手を踏みにじった挙句にその崖から突き落としたのだと言いたくなつたが……純粹に俺を助けようとしたので今回だけは見逃してやるう。俺は首を縦に動かした。

「輝、今回は加奈と一緒に رفتたのかい？」

「はい、いろいろとありましたが看板はゲットすることに成功しましたよ。後これはお土産です。」

俺の手に握られているのはあの道場にいた大きな鯉である。これを買ったら結構な額になるかもしれないと思ってバケツに入れて連れ帰ってきたのだ。

「ほう、すまないねえ。まあ、これで私の夢にも近づいてきたことだし……輝が知りたいことを何か教えてやるう。」

やった！俺として走りたいことが多すぎるのでどれにするか迷うのだが……ひとつだけ気になることがある。

「竜って何ですか？」

「ああ、簡単なことだよ。想像上の生き物……つまり、誰かが作り出したものだ。あんたになついている竜はその昔……どこか

の実験の結果として生まれたものだ。意外に最先端なのかもしれないね。さて、今日は鯉の分としてもうひとつだけ質問に答えてやるう。」

「さすがおばさん・・・三段腹ですね。」

「それをいうなら太つ腹だ。ふざけると明日は来ないよ。」

「冗談です。おばさんは看板を集めてどうするんですか？」

「この世を統一する。」

は？この人はそんなことをほんとにしようとしているのだろうか？疑問が残ったのでもう一度俺はおばさんに聞こうとしたがおばさんは晩飯の準備をしに部屋を出て行ってしまった。

今夜のおかずは鯉こくであった。・・・もしかしてこの鯉は俺が盗ってきた鯉か？まあ、鯉は財布の中に入らずに俺たちの腹の中にその優美な姿を消していった。

「輝、一緒にお風呂に入ってよ。」

「ああ、わかった・・・！！なにいつてんだ？」

「お願い事聞いてくれるって言ったじゃない。」

結局のところ、俺は加奈と一緒に風呂に入ることになった。俺としてはかなり不満だが・・・いや、別に加奈の幼児体系が問題

ではないのだが・・・まあ、もうなんだかどうでもよくなってしまった。これからの俺の人生は流されていくだけに違いはない。流されていく果てにあるものは何なのか俺としてはまったく想像したくないのだが・・・できるならハッピーエンドになってほしい。

「輝、今度は一緒に寝ましようよ!!」

「うえええ!! もしも・・・まさかのまさかで・・・間違いが起こったかどうかだよ!!」

いや、俺にハッピーエンドはむかないのかもしれないな。

飼い犬に手をかまれる・・・（後書き）

ちよつと遅くなつてしまいました。すみません。だけど今度からはがんばっていききたいなあ。

未来予想図？1

十七、

俺は今、自分の部屋で悩んでいる。なぜ、悩んでいるかというと・
・すべての責任はおばさんにある。

今日は日曜日。部活に入っていない俺は日課となっているランニングをした後に朝食を食べに家に戻ってきた。

「輝、たまには頭も使うトレーニングをしたらどうだ？」

目玉焼きを口に運びながら俺は考える。こんなことをおばさんが言ってくるのには何か裏があるはずだ。一応覚悟して聞いてみる。

「・・・何か案でもあるんですか？」

「そうだ、お前がもしも誰かと結婚した後のことを考えらおう。
輝は夢というものを持ったことがないからな。」

「け、結婚ですか？それと夢が何か関係あるんですか？」

「さあな。ああ、状態は新婚状態がいいな。相手は誰でもいいぞ。
私が家に帰ってくるまでにそろえておけ。」

おばさんはそういった後にすぐに出て行った。この家にいるのは
犬と俺だけ。三匹の竜たちはどこかに行っている。俺はため息を出
してから自分の部屋に向かった。

まず、相手がいるのかどうかさえわからない。今までした会話し

たことがある相手にいつてみることにしよう。

「葵の場合」

俺は今、誰かに強く揺さぶられている。まだ目を開けるのにはかなり早い時間である。

「輝さん、おはようございます。」

すでに着替えたのかパジャマ姿ではない葵。今日も彼女の顔はすつきりさわやかといった調子である。俺は目の下に熊をつくってそんな感じであるがしょうがない。昨日は夜遅くまで葵と外で遊んでいたのだ。

「さ、おきてください。」

「・・・わかったよ。」

さつさと起き上がることにして、一階に降りていく。家に住んでいるのは俺と葵だけだ。引越しをしており、二人だけの空間。

台所に立って味噌汁をついでいる葵の後姿を見つめる。なんともいえない感じになり、目をそらす。顔がほてってきた。

「輝さん、どうかしたんですか？」

「い、いや・・・なんでもない。」

葵は不満そうな顔になる。そして彼女は俺の手をおもむろにつかむ。あわてて手を離そうとしたがどうやら遅かったようだ。葵の顔が赤くなっている。

「……私たちは夫婦なんですから、後姿を見ていることで覗き見なんてなりませんよ。」

「……そうだな。」

葵相手に嘘はつけない。それはある意味おつかない事実だ。俺は彼女が作った味噌汁を口に運ぶ。今日もまずい。

「……葵、今日もまずいぞ。」

「……そうですか？輝さんの味覚がおかしいんじゃないんですか？」

俺から言わせてもらえばなんでこんな物が飲めるのか……。味噌汁が入っているなべを見ると魚の尻尾が突き出ている。近くまで行ってみてみるとおまけなのか今日はザリガニがいい湯加減になっている。

「葵……」

「はい？」

俺は振り返ってこの味噌汁なのか何なのかよくわからないものを作った本人を見る。葵は口の中にザリガニのはさみを放り込んでこつちを見ている。まだ動いているような気がするのだが……。

「……葵、味噌汁の中にザリガニをいれるのはやめてほしいんだが？」

「椎名さんがこの前いれたらおいしかったんですよ？ほんとにおいしいんですね。」

おばさんが口ぞえしたようだ。葵はすんなりと人を信用してしまふことがよくあるので困ったものだ。俺は味噌汁はあきらめてご飯を食べることにした。ご飯はおいしく作ってあるのでほっとする。

「輝さん、今日はどこかに行きませんか？」

「あ・・・そうだな。行こうか？」

俺は二匹目のザリガニを口に放り込んで話しかけてくる葵に肯定の言葉を投げかけた。ザリガニを口に入れた状態でよくしゃべることができなあと感心してしまった。

俺は流して食器を洗うことにした。葵は近くの水槽に近づいて何かをやっている。

「葵、なにやってんだ？」

「ライデとアズナブにえさをやっているんですよ。」

見るとそこには大きなザリガニが二匹入っていた。なぜか喧嘩もせずに仲良く水槽の中に納まっている。

「・・・それ、飼うのか？」

「いえ、今度の晩御飯にする予定です。」

「・・・そうか・・・」

俺はため息をついた。

「葵編終了」

「はあ、やっぱり葵が相手だと疲れそうだな。」

机に座りなおしてから大きなため息をつく。まだおばさんが帰ってくるのには早いだろうが・・・ちょっと難しい。

冗談でザリガニの話をしたのだが、あながち起こりそうでかなり怖い。

「・・・輝さん、ただいま戻りました。みてください、大漁ですよ！」

どこかに行っていた葵がそんな声をだしながら俺の部屋にまっすぐ向かってくる。背筋が寒くなったのは気のせいであってほしい。

「輝さん、ほら、みんな新鮮ですよ。」

バケツいっぱいザリガニを持って葵は俺の部屋にやってきた。俺はただただ、そのザリガニを眺めるだけであった。

「葵、もしかしてだが・・・こっちの大きいのが・・・ライデとアズナか？」

どうせ違つだろうと思いつながら葵にたずねてみる。

「ええ！！なんでわかったんですか？」

葵はなんだか驚いているような顔をしている。もうひとつ、きになることがあるので聞いてみることにした。

「・・・葵、こっちの小さいザリガニたちは食べたらいっぱいかな？」

「はい、ちょうど私も食べようと思ったんですよ。刺身にしましゅうか？それとも踊り食いがいいですか？」

嬉々として俺にそんなことを言う葵を見てため息をつくしか俺はしなかった。

未来予想図？1（後書き）

少し出すのが遅くなってしまいました。ごめんなさい。

未来予想図？2

十八、

俺は、頭を抱えて悩んでいる。葵が持ってきたザリガニのこともあるが、おばさんから言われたことがまだ終わっていないからである。

「輝さん、顔色悪いですよ？」

ザリガニをゆでて来て、口の中にほおばって喋っている葵を見る。どこかで見たようにその口からははさが飛び出している。ゴリゴリといやな音が一定のリズムで俺の脳内を暗いほうに導いている。

「・・・葵、ちょっと散歩してくるから・・・留守番を頼んだぞ？」

「私も行きたいのですが・・・？」

俺は首を横に振った。葵と一緒に歩いていたら再びザリガニを捕まえに行くことになる可能性がある。ザリガニは苦手ではないが、ザリガニを食べている葵を見るのはちょっと抵抗がある。簡単にたえるなら気ぐるみの中から人が出てくるようなものだ。

「じゃ、いつてくるわ。」

「はい、いつてらっしゃい。」

俺は家から出て、歩き出した。そうだ、相手を変えてみることにしよう。

く加奈の場合」

俺は朝の光で目を覚ます。カーテンからもれる光が目には厳しい。そして、隣でかわいい寝息を立てている加奈を見る。

「・・・ぐううう・・・」

撤回、凄いいびきをかいている加奈を見る。よだれも少々・・・いや、これ以上言うとなんだか可哀想な気がしたのでやめておこう。俺はそんな可愛い寝顔の加奈の鼻に人差し指を突きつける。いつまでも見ていてもいいが・・・朝からはちよつと刺激というかなんというか・・・とりあえず起こすことにする。

「加奈、早く起きろよ。」

「・・・むう・・・。」

鼻をつつくが起きようとしない。幸せそうな顔をして寝ている。やれやれ、しょうがない奴だ。

「加奈、早く起きないと・・・。」

「・・・ぱくつ・・・。」

ちい、味なまねを・・・こいつ俺の指を噛みやがった。

「ガジガジ・・・。」

「いてえ!!」

しょうがない奴だ。こうなったら強硬手段・・・布団をはがしてから顔に水をかけるしかないな。

「せりゃあー!」

「・・・きゃあー!」

布団をはがすついでに加奈までベッドから落ちた。俺のせいじゃないもーん!ー!いつまでも起きない加奈が悪いんだもーん。

「加奈、おはよう?」

「輝、起こすときはもうちょっとやさしく起こしてよ。たとえば耳元でおはようとか・・・」

こいつは朝から何をいつているんだ?まったく持って・・・

「わかった。今度はしてやるから早く着替えろよ。」

「輝もまだ着替えてないじゃない。」

ぶすつとした顔で俺に文句を言う。いやあ、見ていて和むねえ。

「加奈、そういう顔しても可愛いな。」

「ふん、おだてても無駄よ。」

そんなことを言うが顔は真っ赤だ。こうした仕草や態度も可愛いもんだ。・・・いや、寝顔だけはやっぱり勘弁してもらいたいかも

しない。

「輝、今日は何か予定ある？」

目の前で服を脱ぎだした加奈を見ないように答える。

「いや、暇だ。」

「じゃ、どこかに行こう？」

俺は答えとして頭を下げて部屋を出て行った。後ろからは加奈に馬鹿にされている証拠の言葉が返ってくる。

「別にいいのに・・・」

いや、俺としてはどうかと思うのであえて一階に降りていくことにした。やれやれ、加奈のあの体系を見てもあんまりよろこばねえよ。

どこに行こうか考えながら新聞を眺める。今日の一覧には凄いものが載っていた。

『平和な町の商店街で雷が落ちる？奇跡的ながらも怪我人はゼロ！』

俺は目眩を感じながら新聞をたたむ。そして、丁度降りてきた加奈に聞いてみる。

「・・・加奈、昨日商店街に行かなかったか？」

思ったとおり、加奈はびくつとして俺に向ける視線を伏目がちに

する。

「いや……行かなかったわ。」

加奈の手をとる。それで簡単に加奈が嘘をついているのがはつきりとわかる。

「加奈、俺は別に起こってなんかいないんだぞ？」

「……うん、わかってるわよ。」

加奈はたまに放電する癖があるらしく、何か嫌な事があるとあたりかまわず電気を放出。それにより、ストレスを発散させるらしいいや、まったく困ったものだ……。

〈加奈編終了〉

バリバリバリ……

俺は音がした方を見る。晴れているのにその方向には一筋の閃光が空を切り裂いた。ちよつと不安になってその方向に駆け出す。

駆け出した方向から加奈が走ってきたのが確認できる。どうやら泣いているようだ。しかし、俺を見ると涙を引っ込めてしかめっ面を作る。

「……どうした……小学生にでも間違えられたか？」

そんな冗談を言うと、加奈の顔はいつそうに酷くなる。これは加奈と俺がはじめてあったときと同じ表情だ。雷が俺に直撃する可能性は高い。

「加奈、悲しいときは思いっきり泣け、俺が聞いてやるからな？しつかり受け止めてやるからさ……」

命の危険にさらされて俺は加奈をなだめることにした。加奈は泣き顔に戻り、俺に向かって走ってくる。

「輝あ……!!」

ばりばりばり……

俺の胸に飛び込んできたのは加奈だけではなく、雷というおまけつきであった。

未来予想図？2（後書き）

ちょっと続いてしまいました・・・ほんとにはもつとあとで書くつもりでしたが・・・まあ、しょうがないことです。語感想などをお待ちしておりますのでよろしく願います。

未来予想図？3

十九、

加奈が俺に対して雷をまとったまま突撃してくれたおかげで俺は今、体がしびれている。死ななくてよかった。いや、ほんとによかったあ。

「・・・加奈、もう大丈夫か？」

「・・・うん・・・」

泣きやんだ加奈を離して家に帰らせることにした。誰か知らないが加奈のことを小学生したらしく、そのため、この晴天の中ものすごい雷が落ちたのだ。とりあえず加奈の機嫌が直った事でよしとしておこう。これ以上何かを求めたら俺は神様に怒られてしまうに違いない。

「加奈、ちよつと散歩しようか？」

「・・・いや、いいわよ。私は先に家に帰っておくから・・・」

そういつて俺からぱつとはなれて家のある方向とはまったく違うほうに駆け出す加奈。

「おーい、家はあっちだぞ？」

すでに見えなくなってしまうた加奈はほうつておいても大丈夫だろう。あの子は小学生ではないから・・・

「さて、俺もおばさんから言い渡された課題を考えよう。」

（碧の場合）

「輝君、朝ですよお？」

碧さんが俺を起こしにやってくる。ふすまが開く音がして、足音が俺の隣で止まる。

「ほら、おはようございます！」

俺の顔のすぐ傍でそんな事を言っている。だが、俺としては甘えていたい……。

「……輝君の寝顔は本当に可愛いですねえ。とっても魅力的です。」

がぶり！！がじがじがじ……

「いたいたいたいたい！！」

「輝君、おはようございます！！」

どうやら強硬手段をとられてしまったようだ。俺は噛みつかれた頭をさすりながら体を布団から起こす。ベッドではないのは碧さんが意外に布団のほうがいいと言ったからである。そんなことはさておき、俺はまだ痛む頭をさすって立ち上がろうとする。

「ほら、輝君……」

しかし、碧さんが俺の体を寄せて抱きしめるようなことをする。
そして、俺の頭・・・齧られた部分を手で撫でる。

「ほら、もう大丈夫かな？」

「は、はい！！起こしてくれていたのに気がつきませんすみません。」

もとはといえば俺が悪いのだ。ここは素直に謝っておこう。だが、
碧さんはそんなことを別に気にしていなかった。

「・・・もうちょっとこうしていたいなあ。ね、いいかな？」

「もちろん・・・。」

だが、こんな良い雰囲気は俺にはもったいないのかとあるものが
俺と碧さんを引き離した。

ピーッ！！

「あらら・・・大変。やかんがなってるわ・・・輝君、もう布団に戻
ったら駄目だよ？」

そういつて碧さんは全く慌てていないような感じで俺から離れて
いった。たかがやかんごときで俺の朝の心安らぐ時間を引き裂くと
は・・・。。俺は立ち上がりパジャマを脱ぐ。そして、スーツに
着替えようとして手を休める。今日は休日であった。

「輝君、朝食ができたわよ？」

「はい、今行きます。」

食卓の上には和食の朝である味噌汁やご飯がのっていた。どれも豪華ではないがおいしそうである。

「はい、輝君……あーん!!」

こんな嬉しいおまけまでついているから俺にはもったいないと思う。だが、世の中ギブアンドテイク。

「いや、碧さん……それ無理!!」

何も魚をそのまま俺の口の中に押し込めなくては良いのではないかと俺は思う。そりゃまあ、してくれるのはとっても嬉しいが……その大きさでは俺の口の中におさまることはないだろう。食道の途中で止まってももしかしたら死んでしまう可能性もある。

「そうですか?」

「はい、ちよつと無理だと思います。」

碧さんのいいところは相手にだけさせることはしない。自分でもチャレンジするのだ。そして、俺にはできないことを彼女は軽々やっつけた。そして、行儀よく口の中にきれいに収まった魚を胃に入れてから俺に話しかける。

「ほら、私でもできたんだから多分大丈夫ですよ。」

「いや……多分じゃなくて絶対無理ですよ。」

「できますよ・・・だって私の輝君ですから・・・」

顔を赤くしてそんなことを言う碧さんに俺は無理を承知で魚を口に押し込めた。顔を赤くした彼女は俺の宝物だ。だが、人間ならできないことはやらないほうが良い。

「むぐうう!!」

「きゃあ！大変！！人工呼吸しなきゃ！！」

「嬉しいけど・・・まずは何か飲み物をください!!」

「碧編終了」

うん、あの人なら天然で俺を殺しかねんな。きっとこの後俺は口を塞がれて嬉しい感じで爺さんが待っているところに召されるに違いない。

「輝君、顔色が優れないんですが・・・どうかしたんですか？」

「あ、碧さんじゃないですか・・・」

天然で人を殺せる竜が俺の顔を心配そうに覗き込んでいた。その手には本を持っている。

「それより碧さんはどこに行ってたんですか？」

「ええ、ちょっと本屋にいったんですよ。先生になるには人工呼吸や心臓マッサージを知っておいたほうが良いといわれたんです。」

そういえば碧さんは偽者かどうかはわからないが先生であつた。

「碧さん、頑張つて下さいよ？」

「はい、輝君がそんな状態になつたらがんばりますね？あ、試しに人工呼吸をしていいですか？」

俺が必死に遠慮したのは言うまでもない。なぜなら、彼女が買ってきた本はまだ封を切られていなかったからである。このままいくと俺は数分後に爺さんに会いに行かなくてはいけないだろう……。

未来予想図？4

二十、

車がほとんど通っていない道を碧さんと話しながら一緒に歩く。
彼女の歩き方は一言で言うとお美である。

「輝君は何で部活にはいらんんですか？輝君のクラスの男子はすべて部活にはいつているでしょ？」

「……予習とかする時間がないから部活にはいらんんですよ。それに……部活に入っている連中と入っていない奴等はちよつとみぞみたいなものがありますからね。」

端的にいうなら部活をやっている連中は彼女がいる。運動部なら休日などの練習試合にも自分の彼氏を応援しようと彼女たちがやってくるのだ。そして、文化部なら彼女と一緒に入っていちやついている連中もいる。俺は一日目……入学式のときに部活動をすべて見てまわったからわかる！！俺は彼女もないからなあ……もてない男はつらいぜ。

「あ、ちよつと学校に用事が残っていたのでちよつと行つてきますね。」

「はい、いつてらっしゃい。」

俺は一人になったので再び集中して考えることにした。もう、時間がない。

「穂乃香の場合」

俺は目を覚まして隣で可愛い寝顔の幼馴染を見やる。

「……………」

しかし、実はこれは間違いなく嘘の寝顔だ。穂乃香ちゃんは相手を油断させて敵を倒す。どこからともなく木刀を出して相手がナイフを持っていたとしても勝ってしまうに違いない。

「アキ、隙ありい!!」

寝ている体勢でそのまま俺に木刀を振り下ろす危険度が高い幼馴染。だが、俺はそんな木刀を押さえつけて相手の体に馬乗りになる。

「まったく、朝から危険なことをしない!!」

「だって、隙があつたんだもん。」

そんなことを言う彼女はまるであのころのわがまま娘だ。俺が小学二年の最後に不良から救ってあげた後はちょっかいを出さなくなつたんだが……………。

「ほら、朝食を作るから起きてくれよ。」

「ねえ、私のこと嫌い?」

突然のことで俺はびっくりしたが……………なにを言っているんだ?

「嫌いならいつでも木刀を俺に向けてくる穂乃香ちゃんの隣にはい

ないよ。何か悪いものでも食べたのか？」

「だってさ、なんだが・・・避けられている気がするんだよ。」

俺はとりあえず彼女からどいて虚言でも言っている自分の妻の顔を見る。そんな彼女は俺に向かって再び木刀を振り下ろす。俺は難なくそれをよける。

「ほら、また避けた！！」

「そりゃよけるわ！！あたったら痛いじゃすまないだろう！！」

彼女の一撃はとっても重い。木刀でたたかれるのではなく、電柱があたるような感覚に違いない。

「じゃ、次の一撃は絶対に避けないでね？」

そして、そういった彼女は俺に抱きついてきた。無論、俺はその攻撃をしっかりと受け止める。

「・・・おはよ、アキ・・・」

「ああ、おはよう・・・穂乃香ちゃん・・・」

朝からラブラブ・・・なのはうれしいことだが彼女相手に隙を見せてはいけない。これは彼女なりのテストなのだ。俺がここで隙を見せれば・・・彼女は容赦なく木刀を俺の体のどこかに直撃させるに違いない。そして、俺は彼女に嫌われるだろう。

抱き合ったまま、数分の時間が過ぎる。

「アキ、腕を上げたね・・・そろそろ・・・朝ごはん食べようか？」

「そうだな。」

ふうー緊迫した時間であった。見ると彼女の額にも汗が吹き出ている。そんな彼女の右腕にはいつの間握ったのか先ほど落とした木刀がしっかり握り締められていた。

朝はトーストとサラダ・・・そしてオレンジジュースで軽くすませる。その後は彼女の日課となっている素振りを隣で見学する。

「・・・アキ、今日はどこかに行こうか？」

俺は思いつきりしかめっ面をした。俺が一昔おばさんにいわれてやっていた看板のお使いを穂乃香はどこから聞いてきたのだ。それ以降、彼女は道場を片っ端からつぶしていつている。その勢いは誰にも止める事はできないだろう。

「・・・いや、今日は一緒にお菓子でも作ろうか？」

俺はお菓子作りをするのは苦手だが、こうすることにより低い確率だが彼女を道場破りに行かせないですむ。

「そうだね、そうしようか？」

こうして俺は何とか家の看板が増えるような自体を安全な方向に導くことに成功した。しかし、彼女とお菓子を作るのはかなり大変だ。何事も真剣で熱血的な性格の穂乃香ちゃん自分なりに完璧になるまでやめることを知らない。それはもう、おしりに火のついた

猪のようなものだ。

「じゃあ、今日は・・・ホットケーキを作ろうか？」

「うん、まかせておいて!!」

こんな簡単なお菓子でもスイッチを押した彼女は止まらない。きつと残りの食事（昼食、三時のおやつ、夕食、夜食。）はホットケーキになるだろう。もしかしたら明日のお弁当もそうなるかもしれない。

俺は道場のみんなの代わりに自分のみを犠牲にしたのだ。ああ、誰かが喜んでくれると救われるんだが・・・

「全力でいくよお!!」

（穂乃香編終了）

結果として俺は・・・どれも微妙なところで終わってしまった。これではおばさんに何を言われるかたまったものではない。

「アキ、どうかした？」

「うわぁ!!なんだ・・・穂乃香ちゃんか・・・」

まるで夢遊病患者のような歩き方になっていた俺の目の前に現れたのは何事にもまじめな幼馴染であった。

「大丈夫?もしかして・・・誰かに襲われたとか？」

「いや、大丈夫だよ・・・」

そう心配してくれる穂乃香ちゃんに告げて俺は回れ右をして全速力で走り出す。彼女の後ろには・・・おばさんが立っていたのだ。最後に確認できたのはにたりと笑うおばさんの顔であった。

「輝、私が言ったことを守るところか・・・デートしてるなんてねえ。」

俺はおばさんから逃げる事ができなかった。無念だ・・・。

未来予想図？4（後書き）

えゝこれで・・・四人との心温まる？未来予想図が終わりました。皆さんの中ではどれが面白かったでしょうか？教えてくれるととてもうれしいのですが・・・。これからとりあえず道場の話になつていくと思います。皆さん、これからもよろしくお願いしますね。

爺さんの遺産（前編）

二十一、

季節も移り変わるもので・・・いや、五月が季節が変わったというのだろうか？まあ、なにせよ俺の特になんもない学校生活は一ヶ月がたった。転校してきたという設定の三人と本当に転校してきた幼馴染はいまや学校に完璧になじんでおり、俺の名前より知っている人物のほうが多い。ま、俺としてはいいことだと思っただが・・・。

午前中の授業も終わり、弁当の時間と混合の昼休みがやってきた。俺はその場で弁当を広げる。

「輝さん、今日は私がお弁当を作ってきたんですよ。どうぞ、食べてみてください。」

隣から離しかけてくる葵。俺の弁当箱から赤いはさみが飛び出ている。まだ動いているところを見ると・・・いや、世の中にいいことと悪いことがあるからな。やめておこう。

「・・・いや、俺も弁当を盛ってきているからいいよ。」

「輝、私の弁当食べてみてくれない？」

左隣から加奈が俺に小さな弁当箱をさしだしてくる。俺は一応受け取って開けてみる。意外と中身はまともであった。だが、白いご飯と梅干以外に面積を有しているものはなかった。

「……………加奈、今度一緒におかずの練習でもしよう……」

加奈の弁当を戻して俺は再び弁当をあけようとする。しかし、次にやってきたのは碧さんであった。

「輝君、私のお弁当を食べてみて。残さず食べてくれるとうれしいな。」

みどりさんの弁当は重箱4段で構成されている。いや、こんな量を一人で食べるなんて無理だろう。

「……………すいません、今日は、胃の調子が悪いみたいなんですけど……」

俺は謹んで辞退させてもらい、今度こそ俺が作った自分の弁当を開けようとする。だが、まだまだ先はあった。

「アキ、私の弁当見てみてよ。」

穂乃香ちゃんはなにやら危険な香りのする弁当を持ってきた。

「……………いや、見るだけならいいけど……」

俺は覚悟を決めてみた。だが、俺の目にはモザイクがかけられてよく見ることはできなかった。多分、見ていたら失神していたに違いない。

「味はいけるよ?」

そんなことを言う、穂乃香ちゃんを見て俺は思った。これはうん

味のカレーとカレー味のうん、どっちがいいかと聞かれるようなものだ・・・

ここにいてはゆっくり弁当も食べることはできないと思ったので場所を変えることにした。他の面々はそれぞれ自分の弁当を食べ始めている。葵は、ぼりぼりと音を立てながら・・・加奈は物足りないといった表情で・・・碧さんは他の人より速いスピードで箸を動かしているし、穂乃香ちゃんにいたっては気絶している。

屋上の風は気持ちがいい。俺は一人、屋上で風を体で感じていた。ふ、自分によってしまっぜ・・・さて、冗談はここまでとして俺は限りなく広がる空を見た。

心を整理したいとき、俺は青い空を見る。それは小さいころからの習慣のようなもので、俺は意外と気に入っていることでもある。屋上に設置されているベンチみたいなものに俺は腰掛けて目を閉じた。

ひゅるるるる・・・

何かが飛んでくるような音がして、それがこっちに向かってきたのを知ったのはかなり後のことである。ついでに言うならそれは俺に直撃したらしい。

「輝、お爺ちゃんは久しぶりに登場できて感動じゃ。いつくたばってもいい。」

「爺さん、死んでるんだろっに・・・」

「全く、輝はつれないのお。面白いことを教えてやろうと思ったの

に……」

「ふん、どうせ……またエロいことだろ？」

「いや、お前に必殺技を伝授しに来たのだ。」

爺さんの目は本気だった。ここまで爺さんが本気の目をしたのは……女湯を覗きにいくときと、手鏡を使ってエスカレーターに乗るときぐらいだ。それ以外でこんな目をしたのは初めてじゃないか？

「お前さんが今習っているのはな、全ての声を聞く拳法じゃ。」

いや、ぶっちゃけいつて何を言っているのかさっぱりわからない。

「……つまり？」

「その拳法の技を習得していくことにより、お前は変なものに会う確率が上がっていく。」

「……俺が……葵達にあつたのもその拳法のせいかな？」

「いえす！ざつとつらいとじゃ。次に必殺技じゃが……」

「倒す敵もライバルもいないのに必殺技かな？」

「いちいちうるさいのお。知っていて別に損はなかるう？」

まあ、確かにそうだが……何か問題はないなら別にいいか。

「じゃあ、教えてくれ。せめて痴漢撃退ぐらいには使えるだろうかな？」

らな。」

「男が痴漢撃退するのもありえんじやろつに……。まあ、いいじやろつ。まずは精神を統一するのじゃ。」

俺は言われたとおり、真っ暗な世界で目を閉じ、心を無にする。

「……心を真っ白にするのじゃ。真っ白く真っ白く。」

真っ白く真っ白く

「真っ白く真っ白く純白く純白く」

純白く純白くしろぱんつう！！

「純白 純白くしろぱん……。爺さん、ふざけるのはよそでやってくれないか？」

「ちええ……。冗談なのに……」

この後も俺は爺さんの妨害をくらいながらも……。何とか精神を集中させることができた。

「では次に……。基本の構えを取った後に……。全身から力を取り除き、体に緊張感を持たせる。」

爺さんがいっていることはかなり怪しい。目だけは本当に真剣なのだが……。手元においている本をちらちら見ながら行っているからだ。大丈夫なのか？

「さて、これでいいはずじゃ。それではいくぞ!!」

爺さんはいきなり俺に襲い掛かってきた。いつものおちゃらけ度は全く感じられない。その目はまるで獲物を狙う獣のようだ。それに、強さも全く劣っていないし、逆に強くなっている気がする。

「そりゃ、どうした？」

「く・・・くそぉ!!」

俺の拳はむなしく空を殴り、逆に俺の腹に爺さんの拳が突き刺さる。く、エロじじいめ。

爺さんの遺産（前編）（後書き）

ここから動き始める物語・・・とりあえずこんな感じでしょうか？何がときかれた場合のみ答えさせてもらいます。いや、ただ書くのがめんどいわけではないですよ？

爺さんの遺産（後編）

二十二、

爺さんの行動には隙が多い。そう思っている俺は間違っているよ
うだ。この拳法の主体はどっからどう見てもカウンターで攻めには
向いていないように見えるのだが……。とりあえず爺さんの隙を
狙って攻撃しようとするとその攻撃をつぶされた拳句にその部分に
強烈な一撃を爺さんは打ち込んでくる。

「ほれ、どうした？わしはまだまだ元気じゃよ。」

「ぐうう……。このくそジジイめ。それ！！」

爺さんの体に掠りそうになるのだが、あたらない。これではほと
んど意味がない。

「ほれ、これで最後じゃ。」

「ぐはあ！！！」

爺さんの拳から繰り出される決定的な一撃を俺は頭、胴……

「……………これはおまけじゃ。」

そして股間に食らって倒れた。ぐ、爺さんめ……。いつかぜつて
え、あんたの玉をつぶしてやるぜ。

「うむ、なかなかいい動きじゃったよ。後は実践で慣れればそのう

ち体がついてくる。さすれば・・・誰にもばれずに女湯を覗くことなど朝飯前よ。」

俺はそんな爺さんのたわごとを聞きながら気を失ったのであった。

「ぐうう！！つつつ・・・」

次に目を覚ましたのは・・・一度しか行ったことがない保健室であつた。二つあるうちのベッドのひとつに俺は寝ているようだった。体がいたるところ痛い・・・。特に爺さんに食らった最後の一撃が・・・強力だった。いや、マジで女になるかあの世にいくかの瀬戸際だったぜ。

「・・・少年、大丈夫か？」

「あ、はい。」

俺の目の前にやってきたのはどうやら保健室の先生らしい。身長が高くて顔色は悪い。どちらかというところこの研究所にいそうな雰囲気を出している。

「君は屋上で気絶していたところをたまたま通りかかった生徒によつてここまで運び込まれたのだよ。どうやら頭に何かあたたみたいなのだが・・・それがよくわからなくなってしまつてね。」

「あ、もう大丈夫です。失礼しました。」

俺は急いで保健室を飛び出す。なぜ、急に飛び出したかという・・・あの保健室の先生の背中に・・・女の幽霊に違いないものが見えたからである。くわばらくわばら。たたられたらたまつたもの

ではない。保健室からある程度はなれたところで碧さんにあった。

「輝君、ちょうどよかった。今からよびに行こうと思ってたのよ。」

「どうかしたんですか？」

「ええ、輝君には悪い知らせだけどね……。部活に今から一週間以内にはいない生徒は放課後補修となったのよ。」

「ヴええ！！まじですか！！」

「とりあえずね、何か部活にはいるか、新しく部活を発足させないといけなくなつたの。私としては新しい部活を作ってくれるとうれしいんだけど……。どうかな？」

「ええ、俺はいいですよ。だけど部活ってどうやって作るんですか？」

「私がやっておくから大丈夫よ。それじゃ、明日の放課後は第二生物室まで来てね。」

第二生物室？そんな教室がこの学校にあったのだろうか……。俺は不安に思いながらも……。すでに放課後になって人がない教室までかばんを取りに戻つたのであった。さつさと家に帰って体を休めよう。だが、人生そういかならしく、教室には人が一人俺を待っていた。いや、女子が俺のために残っていたらうれしいのだが待っていたのは見知らぬ男であった。

「やあ、君が白川 輝くんかい？」

「そうだけど？あなたは誰？」

俺は見知らぬ人物にあまり名乗りたくない。今まで見知らぬ人たちに名乗ってきていいことはなかったからだ。それはさておき、このきざつたらしい男は誰だ？こんな男は俺の脳内に記録されていないようだ。

「ふ、僕の名前は黒河くろがわ 暗あんさ。」

うわ、すつげえ・・・嘘くせえ。俺の名前に対抗でもしてるのか？みれば見るほど俺よりかっこいいから腹たつわあ・・・ま、こんなやつの手をしないで帰ろう・・・

「じゃ、黒河・・・俺は用事があるから先に帰るな。」

「ああ、気をつけて帰たまえ・・・いや、ちょっと待った。」

俺のかばんを引っ張って俺の動きを邪魔する黒河。はあ、近頃本当に変な連中に会つな。

「・・・で、あんたは俺に何かようか？」

「ああ、君ほど鈍くて鈍感な男がいるなんて嘘だろうよ。僕みたいなクールな男が気味みたいな熱血少年を教室で待っているときのこの後の展開がわかるだろう？」

ま、まさか・・・

「すまんが黒河とやら、俺は男に興味はない。」

「君は馬鹿か？ライバル宣言をするだろう！！」

クールボーイは顔を真っ赤にして否定してくれた。ああ、よかった。

「で、そのライバルとやらは俺になんでそんな宣言をする？俺が知っている宣言はポツダム宣言だけだが？」

「そうだな、仮に『影でモテル男ナンバーワンを取られた男の挑戦宣言』とはどうだ？」

はあ、やっぱりこの高校を選んだのは間違いだったのかもしれない。

「・・・別にいいが・・・長すぎるから『KNT』でどうだ？」

「うむ、どことなく無理やりでまったく美しくない気がするがしょうがない。いいだろう。」

うわあ、こいつとぜってえ、友達になりたくねえ。俺はこの変な知り合いができるだけ登場しないように祈りながらその『KNT』をした相手から逃げるように学校を飛び出した。

校門のところには葵、加奈、碧さん、穂乃香ちゃんが立っていた。どうやら俺を待っていてくれたようだ。

「輝さん、遅いですよ。」

「すまん、いろいろあったらから遅くなったんだよ。」

別に待ち合わせていたわけではないが・・・待っていてくれたの

でお礼だけはいつておこう。

「みんな、まっててありがとな。」

「いいですよ。」

「そうだよ。」

「そうですね。」

「ま、当然だよ。」

俺と四人？（いや、四匹か？）は夕日を背に家に向かって歩き出した。俺は思う・・・こうして日々が続けばいいと・・・だが、股間を蹴られるのだけはその日々に入れないでほしい、いまだに痛いから・・・。

初めて貰った・・・手紙

二十三、

ライバル宣言を受けた次の日の朝、俺はこれまで生きてきた中で初めての経験をした。やり方が古風だと思うが、俺の下駄箱の中にピンク色の便箋が入っていたのだ。その便箋には達筆な字でこう書かれていた。

『放課後、校舎裏で待ってます。A、K』

その手紙の中を読んでから俺は教室で飛び上がったね。だが、今日の放課後はすでに予定がはいっている。そう、昨日碧さんと約束した場所に行かないといけないのだ。

「うーん、困った。」

「白川、うん×をこの場で出したのか？」

そんな下品な内容で俺に近づいてきたのは言わなくてもわかるだろうが、中学からの友達だ。仮に男子Aでいいだろう。

「・・・いや、実は生まれて初めてラブレターとやらをもらったんだが？」

「突っ込みはないのか？まあ、別にいいけど・・・。そうか、白川には春がやつと来たのか？けどお前には葵さんと加奈ちゃんがいるじゃないか？更に言うなら穂乃香ちゃんもいるだろう？うわさも混ぜるなら碧先生とも関係があるそうじゃないか？もしかしてこの

中の誰かがお前宛に送ったものじゃないか？」

うーん、俺にそんな嬉しそうな事をしてくれるのは一人でもいるだろうか？ 葵か？ いや、葵の奴は俺にザリガニの世話を近頃毎日させてるからな。

却下したら俺を涙目で見やがったからなあ。

じゃ、加奈か？ いや・・・これもないかもしれない。

すぐ何かあったら俺をサンドバックのように扱いやがるからな。じゃ、碧さんかなあ？・・・違うな。この前なんか昼寝していた俺の頭を思いつきり噛み付いたからな。最後の穂乃香ちゃんにいたっては論外だ。あの人が手紙なんて可愛らしいまねをするわけがない。するとしても矢に果たし状みたいにして窓から打ち込んでくるに違いない。

「白川、四人の容疑者の中に心当たりはいたか？」

「いや、どいつもこいつのこの件だけでは白のようだ。普段は俺をぼこぼこにしたりこき使ったりしているがな。」

特に加奈は傷害罪で牢屋に入れられるべきだ。雷なんてまとして抱きついてくんなや！！

「・・・じゃ、誰かのいたずらじゃないか？」

「はつきり言うがまだこの高校の連中で知っているやつらは多いが仲がよい人物は数える程度だ。恨みを買われることなどほとんどないぞ。」

俺と男子Aは考え込んだ。だが、とある女子が俺たちに話しかけてきて・・・正確に言う俺にはない。

「……くん、ちょっと来てよ。」

「うん、わかったよ、いとしのマイハニ！それでは白川、がんばってくれよ。」

こうしてたった一人の相棒は無慈悲にも俺の前から姿を消した。さて、一人になったけどどうしたもんかねえ。もしかしたら間違いかもしれないから無視しておこうかな。

「輝さん、きちんとザリガニさんたちに餌をやってくれましたか？」

「ああ、きちんとするめをやっておいたぞ。」

葵が登校してきたんで俺はいったん思考を停止することにした。青いがもしも俺宛のラブレターを見たらきっと俺を笑いものにするだろう。

「輝さん、手に持っているそれ、ラブレターですよね？」

「いやはや、竜だと直感でも鋭いのかね？一発で手紙がばれてしまった。」

「……ああ、そうだがどうかしたのか？」

「世の中には世捨て人がいるんですね？輝さんなんかを選ぶ人がいるなんて世も末ですよ。」

「うわ、ひでえことを言いやがる。何だって俺がそんなことを言わないといけないんだ？まだ葵たちにはあの本はばれてないはずな

のに……。

「きつとそれは誰かの悪ふざけですよ。」

「……だつてよお、このイニシャルに知り合いはいないんだぜ？」

「ほら、この高校で新しく知り合った人かもしれないですよ？」

新しくできた相棒は薄情な昔の相棒よりも頭が切れるようだ。

「新しく出来たともだちねえ……いや、いないと思うけど？」

「本当ですか？ほら、忘れたい人のことも思い出してくださいよ。」

忘れたいやつ？そんな奴いたっけ……！！

「思い出した！！機能の放課後にそんなイニシャルのやつと話をしたこともあつたけ？」

「昨日のことをそんなに早く忘れないでくださいよ。輝さんの頭はデコレーション前のケーキですか！」

「く、失礼なことを言うんじゃない！！まあ、葵のおかげで無駄な時間を省くことが出来たよ。つか、危うくだまされるところだつたぜ。」

よかったよかった。あんなやつわなに引っかかりそうになるなんてかなり浮かれてたぜ。もうちょっとで俺は奴の笑いだねになるところだった。

「あ、そういえば・・・今日は放課後第二生物室に皆集まるように碧さんが言っていましたか・・・輝さんもですか？」

「ああ、俺も呼ばれているけど葵もか？」

どうやら俺以外にもいろいろ碧さんは呼んだようだ。あの天然なお姉さんが誰をよんだか注意が必要だ。ライオンやトラ、はたまた想像上の自分の仲間を呼んでくる可能性だってある。

「輝さん、何そんなに固くなっているんですか？」

「葵、気を引き締めないとやられるぞ！」

葵は俺の顔を見て不思議そうな顔になった。今頃思い出したがこいつも人間ではなかったんだ。忘れていた・・・てつきりザリガニの化身かと思ってたぜ。

そして放課後、俺と葵、加奈と穂乃香で第二生物室に向かった。葵が言ったことは正しく、昼休みになって俺のもとに二度と登場してほしくなかった俺の中の使い捨てキャラがそのかっこいい顔で俺のもとにきざったらしくやってきた。

「ふ、どうやらばれてしまったようだね。」

「ああ、危うくだまされるところだったが、葵のおかげで助かったぜ。」

「そうか、葵クンとやら・・・どうかな、僕の彼女になってくれな

いか？」

な・・・いきなり初対面でなんてことを言うんだ！！

「輝さんと同じにおいがするから嫌です。」

俺はショックを受けた。いや、被害者は俺だけではない・・・そういわれた暗も石像となり、俺は加奈により立ち直ったが、暗の奴は気がついたら俺の教室からいなくなっていた。葵は何故か怒っており、まるで怒り狂った竜神のようだ。いや、洒落になってないな・・・。

「輝さんは私たちに隠し事をしてるから嫌いです。」

「ちょ、何のことだよ？」

第二生物室に向かう廊下で葵は俺にこういった。身に覚えのないことなので俺は戸惑った。

「机の裏に隠してある本のことですよ！！」

そういわれて俺の頭の中は真っ白となった。ぐ・・・ばれたか・・・。

ああ、謎の部活発足？

二十四、

俺の近くにいた人外の者たちは俺の敵となった。左右から腕をつかまれ、葵は珍しく俺をにらみつけている。そして俺は脂汗を顔に出しまくっていた。

「……最後に言い残したことはありますか？」

「……別にいいじゃん……い、いや！！嘘です嘘！！」

葵は近くにあつた掃除道具の中からモップをもってきて俺に狙いを定める。

その狙いはどうやら俺の額のようなのだ。

……とある人物は手足を狙うなどをして相手を傷つけないようにするそうだ。だが、ある日それを逆手に取られて寒い海に沈んでしまった。死んでなかったのが不幸中の幸いだ。いや、そんなことより今の俺の身の安全は誰がしてくれるのだろうか？よ、よし、俺の腕をつかんでいるどちらかを買収しよう。まじめな穂乃香ちゃんでは駄目だろうからまずは加奈からだ。

「か、加奈ちゃん……言うこと聞いてあげるからこれをといてくれないかな？」

「うーん？私を呼ぶときはいつも呼び捨てなのにこーいうときだけちゃん付けするんだ？いいご身分よね。」

あわわわ……最後の頼みの綱も切れてしまった。ああ、爺さん・

・・・あなたの孫はあなたと同じところに行こうとしています。こんな世の中なんて仕分けしてリサイクルに出すべきだ。

「・・・葵さん、どうやら輝も反省しているようなので許してあげたらどうでしょうか？」

いやいや、どうやら世の中はまだまだリサイクルするべきではないようだ。ごみの中にも使えるものがあるようだ。いや、きっと枯れてしまった花とドライフラワーを間違えたに違いない。

「・・・本当に反省してるんですか？」

大体、何で俺は怒られているんだ？まさかばれるとは思っていなかったのだが・・・どうしたもんだろうか？もしかして葵の夢に爺さんでも出てきて隠し場所を告げたとか？

「はい、これから先はばれないように・・・いえ、二度とそんな不純な本は買わないようにします。」

「はい、約束ですからね？もしも破ったらその命、私がレンタルしますから・・・そのつもりでいてくださいね。」

こうして、俺は釈放されたのであった。ああ、加奈がいてくれたおかげで助かったぜ。もし、加奈がいなかったら今頃爺さんと話し合っていたに違いない。

「・・・皆さん、遅かったですね？」

ようやく第二生物室についた。着いたのはいいのだが・・・こんな地下の実験室みたいなのところでどんな部活をするんだ？まあ、

きつと文化部なのは間違いないだろう。

「……碧先生、いったいこの部屋でどんなことをするんですか？」

穂乃香ちゃんがそのように尋ねる。そりゃそうだろうな。何をするか決まっていなかったらそれは部活動じゃないだろう。

「……ふふふ、じつはですね、この学校の歴史を探っていたらかなり前に廃部となったとある部活があるんですよ。その部活の名前は『秘鑰部』。」

ひやくぶ？ちなみに秘鑰というのは秘密を明らかにする方法、手段などである。

「……で、名前はわかりましたがどんなことをするのですか？」

「そのままです。秘密となっていることを私たちの手で明らかにするのです。」

そう意気込んで力強く宣言する碧さんの姿はどこかの軍のお偉いさんのようであった。たしか、ジーンだったかな？ああ、ちょうど色もあってるからちょうどいいな。

「……秘密を明らかにするって具体的にどうするんですか？」

「簡単ですよ、穂乃香ちゃん。たとえば、加奈ちゃんのスリーサイズや輝君が隠している本の数、青いチャンがしとめてきたザリガニの数などそんなどうでもいいことから、人ではない竜の生態などです。それに、椎名さんから聞きました輝君が使っている謎の拳法な

どのすべてを明らかにするのです。」

うん、前半はどうでもいいね。一つ目は期待したら裏切られそうだし、二つ目は絶対に秘密にしたい。最後のはもはや数えるのも無意味だ。近頃、ザリガニを近辺の川で見ることがなくなっしまったからな。もしかしたらこの地域のザリガニはすべて絶滅しているかもしれない。

「……碧さん、俺から提案があるんですけど？」

「はい、どうぞ、輝君。」

「とりあえず何かのテーマを決めませんか？ほら、月で変えるとかどうでしょう？」

「ああ、いいですね！！それでいきましようか？」

こうして、かなり適当に方針は決まった。その後もいろいろと話し合った結果、次のような役職が出来上がる。顧問 碧 部長

穂乃香 第一副部長 俺 第二副部長 加奈 裏の部長 葵

なんだかよくわからないのも混じっているかもしれないが、そこは愛嬌だ。勘弁してほしい。そして、最後に今月の目標を皆で決めることとなった。これにもなかなか時間がかかる。とりあえず、顧問の意見を聞いてみることにした。

「……まずは輝君の頭を解剖してみましようか？」

「いや、戻せるならいいですけど……誰もいないでしょ！！」

「じゃあ、とりあえず加奈ちゃんあたりを三角のいすに座らせて反

応を見るとか？」

「そんなことしたら警察に捕まります！！第一、あなたは変態ですか？」

「じゃあ、葵ちゃんのザリガニをすべて川に返してあげるのはどうかしら？」

「いい考えですけど、すでに生きているザリガニは家にいません。生きているとしたら葵のお腹の中です。」

「じゃ、穂乃香ちゃんと輝君を本気で戦わせるのはどう？」

「それじゃ、部活ではなく、ただの決闘です。」

さっきから俺と碧さんしか喋っていない。他の部員たちは蚊帳の外だ。

「……じゃあ、この町には数えるのが面倒なくらい道場があるから、なぜそんなにあるか調べるのはどう？ 凄い秘密があるかもよ？」

「まあ、それはいいですよ。」

しかし、それはただ単にあるだけではないのだろうか？

「皆、今月の目標はこの町の道場の秘密よ！！明日からいろいろ調べてもらうからその気でいてね。今日の部活はここまで。」

一方的に本日の部活は終了した。ある程度決まったからいいだろ

うが、これからどうなるのだろうか……。まさかとは思うが、碧さんはこの町について何か調べているのではないだろうか……。きつとおばさんにいろいろそのかされたに違いない。

「……アキ、顔色悪いけどどうかしたの？」

「い、いや……。ちょっと考え事してただけだ。」

「？ならいいけど……。」

俺たちは来た道を再び四人で歩き出した。なぜだか思う……。俺は誰かの手のひらの上で踊っているだけではないのかと……。つまり、俺の隣にいる竜たちと出会うのは仕組まれたことではないのかと……。いや、考えすぎだ。これはサスペンスでもなんでもない、ただの学校生活のはずだ。うん、そうに違いない。

「輝さん、考え事ならこれを飲めばいいですよ。」

心の中から心配そうな顔をして、葵は俺の手にひとつのビンを渡してくれた。だが、それには蛇が入っているのであった……。はあ、不安だ……。いろいろと。

ああ、謎の部活発足？（後書き）

さいしんするのが遅くなりました。すみません。

ああ、俺はもう・・・天にも昇る気持ちだ。

二十五、

・・・輝、おまえの・・・を・・・もらう!!

「・・・うわああ!!はあはあ・・・」

俺は目を覚ました。部活が発足して次の日の朝に・・・。どうやら嫌な夢を見ていたらしい。だが、その中身は思い出すことが出来ない。

外はまだ暗く、起きるのに早かったのでとりあえず寝ることにした。それにしても嫌な感じだ。

そして朝、眠たいので布団を抱き枕のように扱う。今日の布団は前日干してもいないのにやわらかかった。うーん、もっとこうしていた・・・

「・・・！！！！！！」

いやいやいやいや・・・俺が抱いていたのは布団じゃねえ!!加奈だ!!加奈を抱きしめてるじゃねえか!!

「あわわわあわわわわわ・・・」

俺の目は完全に覚醒。なんだかこの勢いならお化けだつて見えてしまいそうなくらい、目がさえている。いや、ほんとになんて加奈がいるんだ?あ、ちょうどいいや。目を覚ました。

「……………か、かなあ……………な、何で俺の布団に入ってたんだ？」

「……………？あれ、おかしいな？トイレの帰りにちゃんと部屋に戻ったと思っただけだ？それに、どうやらトイレを間違えたのは私だけじゃないみたいだよ？」

そういつて加奈は俺の右側……………を指差す。

「すゝすゝ。」

「……………。」

そこには葵と碧さんが静かに寝息を立てていた。い、いつの間に！？

「ど、どうなってたんだ？」

俺は、布団から飛び出るきつと一糸まとっていないだろう、竜たちの肩を見る。いや、何も布団をはがして服の有無を確認するわけではありません。ここからでもきつと服を着ていないのはわかります。

「……………加奈、とりあえず俺は下に行くから他の二人が起きたら服を着せてから降りてきてくれよ？」

「え、うん。わかったよ。」

布団がはがれないように気をつけながら俺は布団から這い出る。こんなところをおばさんに発見されたあかつきにはきつと吊るされた後に皮をはがされるに違いない。ああ、考えるだけで背筋が……………

・つて!!

「なんで、何で穂乃香ちゃんまでいるんだあ!!」

加奈の隣には俺の幼馴染が寝ていた。いや、すごいな・・・てかこんなに大人数がはいっているのにどれだけでかいんだ、俺の布団・・・。

「まあ、何事もなかったようなのでよしとしよう。さて、おばさんにばれないようにしないと・・・」

「へえ、誰にばれないようにしようだって?」

俺の体が固まる。かちんこちに・・・勇氣を出してその声が出たほうをみる・・・と、そこは窓であった。知っていると思うがここは二階だ。なぜ、おばさんの顔が窓の向こうにあるのだ?

「輝、ハーレムにでも目覚めたか?」

「いえ、滅相もございません!! 気がついたらこのような状況に追い込まれており、自分としてもなぜこうなっているのかさっぱり見当が付きません!! うれしいかと聞かれたら首が折れるまでふれる自信は一応、あります!!」

「そうか、じゃあ、話があるからさっさと下にきな。」

ああ、この調子で行ったら俺は死刑確定か? 最後に天国のような光景を心に刻んでおくべきだろうか? うゝん、これは困った。

とりあえず、少しだけ悩んですぐに下に行くことにした。ま、なんとかなるさ。いや、なつてもらわないと俺の命は風前の灯。

下に降りた俺を待っていたおばさんは台所に立っていた。その手には良く切れるだろう、包丁が怪しく輝いている。ああ、おばさんはぶつ切りが好みですか？それともミンチが好みでしょうか？

「・・・さて、輝、これからお前にはいろいろやつてもらいたいことがある。」

「はい！何でもおつしやつてくださいー！！」

「この地域にある道場をすべて潰せー！！」

「はー！！了解いたしましたー！！出来ればその理由も教えてくれると非常にうれしいのですが？」

これはふざけているのではない。生き残ろうと俺も必死なのだ。そう、これは命令を上級兵士が下級兵士につげるようなものだ。もしも、却下されたら俺はどうなるのだろうか？

「・・・とりあえず、お前が使っている拳法のことを自分で知るチャンスをやっていると思え。」

「は、質問に答えていただき、天にも昇る気持ちです。」

「そうか、それじゃ、天に送ってやろうか？」

「結構ですー！！」

そういつて俺はその場から逃げ出した。とりあえず、比較的安全

だろう、トイレに逃げ込む。

「……俺の使っている拳法を知るチャンスか……」

そういつて俺はため息をつく。結局、知るためには自分で調べないといけないのであろう、それにあのおばさんのことだからパンドラの箱を開けるよりも大変なことがあるのかもしれない。でもまあ、もしかしたら葵たちのことを詳しく知ることが出来るかもしれないのでがんばってみよう。

「……輝さん、早く出てください。」

「あ、すまん……」

やってきた葵がトイレの前で声を出す。そして、俺はトイレを出る。そしてまた、俺の身に信じられないことが起きた。

なんと、葵が俺の胸に飛び込んだのだ。

「……輝さん、どこにも行っちゃ嫌ですよ？もしも私たちをおいていったら覚悟してくださいね。」

「あ、ああ？よくわからんがわかった。肝に銘じておくよ。」

そついうと葵は俺から離れた。その顔には笑顔が広がっていた。

「……約束するから、目をつぶってください。」

言われたとおりに目をつぶると、唇に何かあたった感触を覚えた。目を開けると、そこには葵の顔が広がっているだけであった。……

・ ・ ・ あははははは ・ ・ ・ いや、はずかしいねえ。
そして、俺は学校に遅刻したのであった。

ああ、俺はもう・・・天にも昇る気持ちだ。（後書き）

遅くなつてすみません。ちょっといろいろな事情がありまして・・・
・というより、今に始まったことではないですが大量の誤字を発見し、修正していました。

ああ、どうなるのだろうか？

二十六、

まあ、とてもうれしいようなことがおきたその日の部活。その日は加奈と一緒に近くにある道場に向かうこととなり、二人でその道場に向かう道を歩いていた。

「加奈、何で今日は皆俺の部屋にいたんだ？」

「……はは、恥ずかしいけどね、多分、皆輝の夢を見たんじゃないかな？」

お、俺の夢を見たのか？そりゃもう、夢の中では夢を見てる本人の好きなように出来るらしいけど……つ、つまりそれは……。

「と、とりあえずどんな夢だったんだ？」

俺はあせる気持ちを沈めて加奈に聴いた。

「……輝がね、誰かに負ける夢で……そうだね、私の記憶しているのは輝がぼろ雑巾のように転がってたんだよ。」

ひ、ひでええ！！あんまりだろ、それは……。

「そこで夢はおしまい。私は心配になってとりあえず輝のところにいったんだよ。」

そ、そうなのか……はあ、まあ……皆俺のことを心配し

てくれていたのは嬉しいな。

「加奈、心配してくれてありがとうな。」

「ふふ、いいわよ。」

全く、まるでお姉さんみたいだな。さて、そうすると他の竜たちも俺が散々に負けて使い古された雑巾のようになった夢を見たのか？そしてもう一つ、それは俺が見た夢と関係しているのかもしれない……なんだか、波乱の幕開けのようだ。

「あ、ここだよ。」

「……ここは銭湯だろう？」

「いや、まちがってないわよ。ほら、こっちのほうに奥のトイレより右のほうに銭湯拳をおしえていますって書いてるじゃない？」

加奈が顧問から渡された紙を見ながら俺に言う。いや、本当にこの土地は凄いな。これはどこからどう見ても風呂屋だろう？それに銭湯拳って何だよ？

「ま、さっさと看板を持って帰ろうよ。それが無理だとしても話ぐらい聞けると思うからね。」

そういつて加奈は一人で銭湯の中に入っていく。俺もとりあえずその後に続くことにして、再び、銭湯をみるがどこからどう見ても銭湯だ。

だが、番頭さんに案内されて初めて気がついたが、なんだか殺気

立ったものを感じるようになった。

「……………どうぞ、こちらでございます。」

そうして、俺と加奈は銭湯の中にある道場の中に案内された。そこには、ありえない相手が正座をして精神を集中していた。

「ば、ばあちゃん!!」

「……………久しぶりじゃ、輝……………」

そう、そこに座っていたのは俺の親父側の母親であった。爺さんも親父側なのであの爺さんの妻にあたる。最後に見たのは…………俺が今住んでいる家に来たときだな。そのときはばあちゃんと来たんだが、ばあちゃんはすぐにいなくなっただよ。行方不明だったと思っただんだが?

「輝よ、近頃お前の夢にあのスケベジジイは出てきたか?」

「え?う、うん…………近頃は良く出てくるけど?」

「そうか、今度あのスケベジジイの墓をもう一度破壊しておこうかの?ま、それはいいとして輝の隣にいる可愛いお嬢さんは竜だろう?」

「!!…わかるの?」

はつきりいつておくが、ばあちゃんはあの爺さんより数倍は強い。新型エンジンを積んだガンダ 並だろう。まあ、そんなばあちゃんは爺さん意外には優しいのだ。

「……ふうむ。お前もようやくあの意味のわからない拳法が少しは使えるようになったようじゃな。まあ、とりあえずどれだけ強くなったか見せてもらおうかの？」

そういわれて俺は白旗揚げて土下座して謝りたくなった。まあ、昔の話だが……。一度爺さんがちょうど家にいなかったとき、爺さんの代わりにばあちゃんが手合わせしてくれたのだが、その結果として俺は一ヶ月ぐらい入院していたらしい……。俺はばあちゃんと向かい合ったところまでは覚えていたのだが、それ以降の記憶を忘れている。

「……輝よ、男というのはな、砕け散ってこそ華なのだ。つまり、玉砕覚悟の気持ちを持って何事にも挑むべきなのだ。」

「……はい、わかりました……。」

俺は銭湯の中にある道場にて、この前も勝つことが出来なかった爺さんより数倍強い敵を相手に正直ビビっている。簡単に想像するなら、雨の中、不安と恐怖に震えている子犬みたいなものだ。とても優しい飼い主が現れるならいいが、今俺の前にいるであろう、ばあちゃんの場合の優しさはちよつと違う。武士の情け……。つまり、これ以上苦しむことがないように震えている子犬をしとめようとするのだ！！

「ほら、仕掛けてこないならこっちからいこうかの？」

そういうと、あっ！！という間にはあちゃんが目の前にいた。速い、速いよ！！

そして、俺の体もそのスピードで後ろのほうに吹っ飛ぶ。建物の

中には限りがあるので壁に激突。俺は思いっきり背中を強打し、少しの間呼吸をすることが出来なくなった。……。手加減して多分このレベルだろうな……。遠くから加奈が驚いてあげている声が聞こえる。

「輝、何かあのスケベジジイから教えてもらってないのかい？」

「？いや……。どうだったかな……」

「そうか、じゃ、いつペン会ってきなされ。」

ばあさんは先ほどと変わった呼吸法をした後、冷徹なオーラでもまとっているのかとてつもなく怖い顔となった。

「……。今から輝に打ち込む技はな、死者に会いに行くというものじゃ。」

「……。つまり、俺の息の根を止めようということですか？」

ばあちゃんはぞっとするような微笑を浮かべて……。何も言わなかった。そして、俺が瞬きしたら俺の視界から消えており、気がついたときには懐に入り込まれていた。

「……。『阿野世遺棄』！！」

「……。輝、生きとるか？」

「……。いや、爺さんに会ったということはどうやら死んでるよ

うだ。というより、殺されてしまった。」

「まあ、あれじゃ・・・元氣を出せ、これからお前にいろいろ教えてやるからな・・・あのにつくきくそばあを倒してくるんじゃないぞ？いいか、絶対に息の根を止めるなよ？もしも息の根を止めたら間違いなく、わしの命はない。」

「・・・いや、爺さんはもう死んでるだろう？もう殺されるわけがないと思うんだが？」

「甘いぞ、あの婆は人間ではなく、竜なのじゃ・・・。」

「う、うそお！！」

「嘘ではない、わしも生きていた頃はまだまだ青二才じゃったな・・・若さゆえにあんな凶暴な竜を娶ったのだからな。今覚えれば、過去に戻って人生をやり直したいものじゃ。ドラ もくん！！たすけてええ！！」

「まあ・・・爺さん、とりあえず俺に何か教えてくれないか？そのために俺は死んだみたいだからな。」

「・・・よし、それではこっちについてきてくれたまえ。」

ああ、これからどうなるのだろうか？

二十七、

「爺さん、どこに行くんだ？」

「……とりあえず、この前のは冗談だったとして、もうチョイお前を鍛える。」

それから爺さんは何も喋ることなく、目的地までもくもくと歩いていった。ずっと真つ暗なところを歩いていたが、ある意程度まで歩いていくと、その暗闇もなくなり、神社のようなところに着いた。

「爺さん、ここはどこだ？」

「ここか？ここはな……いわば修行をする場所じゃ。ほれ、あの巫女さんを見てみる。あんな小さいこも修行をしているのじゃ。」

指差すほうには赤いはかまを着た女の子が竹箒で境内を掃除している。一見すると、何事もないように見える。爺さんが女の子に近づくと、女の子はこっちを見て、爺さんに頭を下げた。

「……菜々美たん、今日もええけつしてるのお？」

「気持ち悪いです！！せりやあ！！」

そういうと、持っていた竹箒を爺さんに向かって振り落とす。だが、さすが爺さんというべきだろうか？それをあつさりと避けて俺の元まで帰ってきた。むなしく空を切った竹箒はそのまま地面に着弾……その部分がめり込んだ？

「うむ、まだまだひよっこじゃな。」

「爺さん、竹箒が何で地面にめり込むんだ？」

「……ああ、気にするでない。お前に関係ないからな。それに、菜々美たんはわしのものじゃ。貴様にはやらん。」

そういつて俺はその名波という少女がいるほうとはちょっと違うところに俺を連れて行った。そこには何もなく、あるのは爺さんの形をした大きな像だけである。

「どうじゃ、輝……すばらしいだろう？細部に渡るまでわしに似せて作らせてある。そう、いわばこれはわしの生き写しじゃ。だがな、これを怒らしたら怖いぞ？」

「……で、それはいいとして俺は何をしないといけないんだ？」

「つれないのお、ま……いいか。とりあえずそこに座って精神を集中しろ。雑念があれば、問答無用で……」

爺さんは指を鳴らすと、菜々美という女の子が……とげとげしたものをバットに打ち込んだ多分特別仕様の奴を持ってやってきた。

「……菜々美たんのお仕置きが貴様を貫くだろう……」

菜々美という女の子はそのまま爺さんに向かって持っていたものをぶつける

「……そう、こんなふうにな……」

爺さんはその場に倒れ、残ったのは爺さんを倒した女の子と俺だけである。

「……さて、集中、集中！」

俺は倒れた爺さんを見なかったことにして座禅を組んで頭の中を真っ白にさせる。

「す、す、ばきばき！ぐしゃああ！」

後ろではきつと見たらモザイクがかかるような光景が広がっているに違いない。そう、あの菜々美と言う女の子がきつと倒れている爺さんに鉄槌を下しているのだ。そして、もしも俺が少しでも動いたら……きつと爺さんのようになるに違いない。それだけは避けたいものだ。

だが、どうやらその少女が叩いているものは爺さんではなかったようだ。その証拠に今、

「……輝、ほれ、真っ白のパンツじゃよ？どうじゃ？」

そう、俺の周りをうろろしているのだ。そして、眼をあけていないのでわからないがきつとその手に持っているものを俺の目の前でひらひらさせているに違いない。く、むかつく！！

なら……あの少女は何を相手にあんな恐ろしい音を立てているのだろうか？途端、俺の心に好奇心が湧き上がり、確かめたくなった。しかし、爺さんがうろろしている状態ではそれも難しい。つまり、結局のところは爺さんがやめというまで後ろの光景を見ることが出来ないようだ。

それから少しの時間が経った。

その間も爺さんはいろいろと俺に試してみたらしく、爺さんがあきらめて俺に終わりを告げたのだ。あたりにはいろいろなものが散乱している。・・・記念に持って帰ろうかな？いや、もって帰った場合は・・・再びこっちに送り返されるかも知れん・・・そのときは葵たちの手によって葬られることだろう。

後ろの音はほとんどしなくなっており、時折聞こえてくる音は

ひゅ！どがん！！はあはあはあ・・・

といった誰かが誰かの攻撃を避けるような感じの音であった。それに荒い息遣いの音も聞こえてくる。

「・・・輝、第二ステップじゃ。菜々美たんより先にあの黒龍を倒してこい。」

ようやく、しよげていた爺さんは俺に次の壁を与えた。そして、後ろを向いた俺は驚愕したのであった。

なんと、あの爺さんの像の一部が竜になっているではないか！！いや、微妙にあれば下ねただ！！

「・・・爺さん、あのふざけた竜はなんだ？」

「・・・この主じゃ。暴れくるっていた奴をわしが封印してな、征服した証としてあのような形となった。名前はさっきも言ったが黒龍といってな・・・いやあ、なかなかのじゃじゃ馬じゃった。輝、がんばれよ。」

爺さんはそういうと、あたりに散らばっているものの中からエロ本を探し当てると読み出した。これ以上、俺と話していても面白くないと思ったのだろうか？まあ、今はそんなことより、あのお下品な龍をしとめるのが先だろう。俺がその竜の近くに行くと、後ろから爺さんが何か言ってきた。

「……輝、お前に前教えた呪文はな、人外のものから力を奪い取るものじゃ。それによつて、力がある程度まで抑えられた竜は他のものに形を変える。そうじゃな、友達が欲しいとおもえば、その種族と同等の形になる。まあ、そんなことより、力を奪えばその力を使えるわけじゃ。しかし、使い方はお前ががんばって見つけるよ。最後に……黒龍が菜々美さんに倒された場合、お前の負けとなり、今度は輝が彼女の下僕となるから気をつけるよ。」

え……それって意外と重要なことじゃない？そんな……鼻くそほじりながら言わないでくれよ！！

俺はあわててすでに戦闘が始まってかなりの時間が経っているだろうことが予想される戦場に飛び込んだ。戦況はどうやら、下ねた竜のほうが優勢のようだ。彼女が持っていた武器はすでになく……・一応、あるのだが爺さんの像の顔部分に思いつき突き刺さっていた。

「……はあ……はあ……はあ……はあ……」

片ひざついた菜々美に黒龍がほえると、かまいたちでも発生したのだろうか？菜々美の服がところどころ切れた。

「おおっ！！絶景じゃ！！」

後ろで爺さんがほえている。とりあえず俺は負傷している彼女のところまで走っていき、黒龍から遠ざけた。まだ、抵抗する気があるのか菜々美は俺に抱きかかえられたときに俺の股間をけりやがった。くうううう！！いてええええ！！

「胸触らないでよ！！変態爺の孫！！」

「……ううう、いてええよ。というより、爺さんと俺を一緒にするな！！そんなペタンコな胸なんて俺の眼中に入ってねえよ！！とりあえず、危ないからどかしたただけだ！！」

俺はそのまま竜の攻撃範囲からおよそ離れている場所に菜々美をおき、寄ってきた爺さんを気絶させると一人で黒龍のもとに走っていった。黒龍は暴れたいのか近づいてきた俺に攻撃を始める。

「じゃあつあああ！！」

その動作がかなりゆっくりに見えたような気がしたので避けてみると、あっさりと黒龍の攻撃を避けることに成功した。そして、黒光りする流れ弾は爺さんに直撃！

さて、竜には何度殺されたことか……。ここで仕返しをしたと思うので俺は本気で行くことにするぜ！！

ああ、終わってしまった・・・（前書き）

これで一応、終わりとなりました。試しに書いていたものなので・・・これからどうなるかはわからないところです。いままで、応援ありがとうございます。

ああ、終わってしまった・・・

二十八、

「・・・よ、せい!!」

俺はだんだん下ねた竜の近くに行くことができた。そして、なんだかわからないが湧き上がってきたものを拳に重ねて・・・叩きつける!!

ばっしゃーん!!

「ぎゃああ!!」

竜に聞いたのかはわからないが、どうやら、痛がっているようだ。でも・・・今俺の手に水がついていたような?

「うむ、輝よ・・・それが極意なのじゃ。奪った力を使いこなす・・・それがこの拳法の真髄じゃ。しかし・・・まだまだじゃな。」

いつの間に復活していたのだろうか? 爺さんは俺の後ろに立っていた。

「ほれ、早くしないと黒龍が復活するぞ? 心配はいらん、あの黒龍は寝起きが悪いだけじゃ。もう一度眠ってもらえばいいことじゃ。」

俺は遠慮なく、苦しんでいる竜に攻撃を再開した。しかし、不思議なもんだ。座禅組んでただけでこんなに強くなれるものなのだろうか? うゝむ、謎だ。誰か教えてもらいたいものだ。

それから、ようやく俺は黒龍を鎮めることに成功した。

「はぁ．．．．はぁ．．．．はぁ．．．．」

俺ももう限界だ。菜々美と同じように片膝をつきその場に寝転んだ。も、もう駄目だ。死にそうだ！！

「さて、輝よ。黒龍を見事倒したお前を復活させようと思ったのだが．．．．どうやら、無理のようじゃ。」

え．．．．今何といました？それもなんだかすごいことを言われたような気がするのですが？

「．．．．あまりに遅いお前の帰りにどうやらばあが待つてくれなかったようなのじゃ。結果、火葬されたのじゃよ、お前の体はな．．．．」

ええええつええ？か、火葬？

「つまり、俺は完璧に死んだことになってるのか？まだぴちぴちなんだぞ？」

爺さんは耳を塞いでおり、どうやら俺の話を聞きたくないようだ。しかしお前．．．．火葬だって？冗談じゃない。

「．．．．まあ、どっちにしろ体がもう腐敗してたんじゃないかのう、そんなときにお前の体にお前が戻ったら現代版のゾンビじゃな。頭を撃たれて終わりじゃな。」

「じゃ、なにか・・・俺はもう、どうすることも出来ないのか？」

「安心せい、あそこに女の子ならおるじゃろう？あそこで我慢せい。」

爺さんはそういうと、菜々美を連れてきて俺の目の前に置いた。
菜々美は俺を見上げている。

「・・・爺さん、とりあえずどうにかして俺は戻ることが出来ないのか？」

「あれ？スルー？・・・そりやもう、死んだ人間を生き返らせるのなんて無理じゃ。体が残っているならまだしも、カルシウムの塊となつているお前の体に何をしても無駄じゃろうな。ま、犬の餌になるか学校の校庭に引くラインぐらいしか使い道がないと思うがの？」

さて、選ぶならどっちがいいかな・・・じゃない！！

「じゃ、なにか・・・やっぱり俺はここで暮らさないとイケないのか？」

頷く爺さん。そして、再び菜々美を押し出してきた。なんだ？菜々美がなんかしてくれるのか？

「・・・ほれ、昔お前に言わなかったか？確か・・・お前が三歳ごろの話じゃ。」

「覚えているわけないだろう！！で、それがどうした！死んだ人間

「関係あんのかよ？」

爺さんは菜々美に耳打ちをする。するとどうだろうか、菜々美は驚いて俺のことを見上げ、さっきと見る目が違っている。

「……まさか、許婚とか言わないよな？」

「ふん、貴様に許婚など存在するわけがなかるう？この子はお前の妹じゃ。その昔、両親が死んだときに一緒に死んでしまったのじゃ。」

「はあ、よかった。許婚じゃないのか……え、爺さんは今、なんて言った？」

「い、妹？そんなの俺にいたのか？」

爺さんは頷く。そして、菜々美は俺に抱きつく。

「お兄ちゃん！！」

は……どうなってんだ？誰か教えてくれ……。

「……輝、いいお兄ちゃんになるんだぞ？」

「チョイ待て！そんなの俺は知らないぞ！！いったいどうなってんだよ！！説明しろ！！」

「いいか、輝……実のところはお前の両親はな、ある時、事故を起こした。そのときお前はわしの道場にやってきており、わしから拳法を教えてもらっていたのじゃ。その日はな、今までお前に黙

っていた妹のことを話そうと両親は離すためにお前のもとに行こうとしたのじゃ。妹は重病じゃったがその病気も治り、憧れのお兄ちゃんに会うために喜んでおった。だが、事故で死んでしまい、両親はさっさと成仏してしまっただのじゃ。だが、この世にすんごい未練があった菜々美はここに残ったのじゃよ。」

ぶっちゃけいつて・・・俺の両親って意外に淡泊な人だったのかもね？残された俺のことを特に未練だとおもわなかったのだろうか・・・

「で、ここに残った菜々美をわしは見つけたのじゃ。そして、血のつながっていると知っていながら・・・他人のふりをしてこの子を鍛えたのじゃ。輝と同じ拳法を教えてな。」

俺の体に顔をこすり付けていた菜々美は眠ってしまったようだ。しかしまあ、そんなことを急に言われても困るのだが？で、結局俺はどうなるのだろうか？

「爺さん、俺はどうすればいいんだ？」

「・・・一応、方法はあるが、まあ、とりあえず少しここで生活していきなさい。あるとしても今は無理だからな。」

そうだな、普段出来ないことをしておくのもいいかもしれない。これはこれで楽しんでおくことにしよう。

「わかった。とりあえずここで生活させてもらう。」

「・・・そうか、まあ、そんなことより飯にしようかの？」

そういえば・・・こっちにきて何も食べてなかった。おなかが減ってたんだな俺も・・・

「・・・・・・・・白龍か・・・・・・・・」

「?・・・なんか言ったか爺さん?」

「なんでもない。爺の戯言じゃよ。それより輝、面白いビデオとデイーブイデーというものがあるが、見るか?」

「・・・・・・・・遠慮しておくよ。」

「ちょっとなら大丈夫じゃよ。ここにはお前さんを咎める葵とか言う竜もいないしな。たまにはどうじゃ?」

「いや、やめておく。」

なぜ、かたくなに俺がそういったのか・・・それは、なぜだか知らないが・・・この会話を誰かが聞いているような気がしたからだ。気のせいならいいのだが・・・もしも、もしもだが、俺が承諾してしまつて葵たちの耳に届いたら俺は吊るされること、間違いなしだからだ。きっと、俺はいつか・・・みんなのところに戻ってみせるさ・・・

く完く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0699b/>

竜と書いてドラゴンと呼ぶ！

2010年10月29日12時50分発行